

---

# 蒼の残影

灯里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼の残影

### 【Nコード】

N2511X

### 【作者名】

灯里

### 【あらすじ】

何も知らなかった。誰も教えてくれなかった。人は一人では生きていけないこと。知らなかったでは済まされない。無知は罪なのだから。

魔都クロスベルで巻き起こる事件の数々。それは軌跡ではなく、蒼の残影。

零の軌跡の原作沿い二次創作小説。最初からかなりネタバレしてまゝ。碧の軌跡にも続きます。空の軌跡のネタバレも含まますのでご

注意を。

オリジナルキャラが登場します。傾向としてはシリアスで友情重視、恋愛要素薄め、ランディ寄り。

## 人物紹介（前書き）

主人公は盛大に空の軌跡のネタバレを含んでいます。閲覧には注意してください。

## 人物紹介

『何故？ だってわたしはそれしか知らなかったから』

ルイン・アスール

本作品の主人公。十八歳。武器は刀。クロスベル警察の新米捜査官。ロイドとは同級生。

何事に対しても冷静で冷めていると思われがちだが、結局は他人を助けてしまう。

今は亡き義父は遊撃士<sup>フレイサー</sup>で、警察学校に入学するまでは義母と共にクロスベル市内で暮らしていた。警察官になったのは、遊撃士<sup>フレイサー</sup>では守れないものがあるから。

とある事情から本気で戦うことが出来ない。戦うことは本人曰く『リハビリ』らしい。

エニグマカバーは「エンドレスブルー（endless blue）」。ストラップは白い羽飾りと青い薔薇の造花。

以下、空の軌跡のネタバレを含みます。

《結社》の元執行者候補。候補時代は青薔薇と呼ばれていた。とある仕事に失敗して用済みとなり、瀕死の重傷で捨てられていた所を義父に救われる。その時に使っていた武器は剣だが、義父に刀の扱いを教えられた。現在持っている刀は義父の形見の品。

過去のトラウマから無意識にリミッターをかけてしまったため、全力で戦うことが出来ない。

## prologue

松明の光に照らされて、長い階段を下って行く。自分の体だといふのにまるで自由にならない。誰かが勝手に動かしているようだ。戸惑うルインをよそに、自分は前を走る者たちと共に立ち止まった。振り向いた人物を見て息を呑む。鳶色の髪と同色の瞳。白いジャケットを纏った少年はルインの良く知る彼だった。

ロイド・バニングス。ついこの間まで警察学校で共に学んだ学友だった。

だが他の男女には見覚えがない。

長い灰色の髪の少女は恐らく、ルインやロイドと同年代だろう。整った聡明そうな顔立ちをしている。纏う雰囲気からして良家の息女といった感じが。

水色の髪を頭上で二つに纏めた少女はせいぜい十代半ば。緑掛かった黄色の瞳に落ち着き払った彼女は冷静に辺りを見回していた。

そしてもう一人。肩近くまで伸びた赤毛を無造作に後ろで纏めた青年。オレンジのジャケットを羽織った彼には見覚えがある。あるが思い出せない。

それよりもこの遺跡のような場所はどこだろう。長い間放置されていたのか、石畳は所々ひび割れ、苔が生えていた。するとロイドが水色の髪の少女の方を向く。

「どうだ……テイオ？」

「……悪い予感の中です。時・空・幻……。上位三属性が働いています。《塔》や《僧院》と同じですね」

どうやら彼女はテイオ、という名らしい。しかし一体どういうことか。時、空、幻の三属性は上位属性と呼ばれ、本来なら働くはずもないものだ。

彼女の口から出た《塔》、《僧院》がどこを指しているのかも分からない。テイオの話を聞いた灰色の髪の少女が息を吐く。

「そう、やっぱり……。どうやらこの先は一筋縄では行かないみたいね」

「って事は、あの得体の知れない化物どもが徘徊してるってことか。やれやれゾツとしない話だぜ」

「そう？ 悪魔だろうと何だろうとわたしたちを阻めはしない」

やれやれ、と大げさに肩を竦める青年にルインは微笑する。悪魔だろうと何だろうと、自分たちを阻むことは出来ない、と。

やはり体は自由にならず、見ていることしか出来ない。

「そうか……。分かった。当然、敵による待ち伏せもあるはずだ……。みんな、気を引き締めて行こう！」

皆、ロイドの言葉に力強く頷き、再び歩き出した。

長い階段を降りると、開けた場所に出る。道は三つに分かれているが、その内二つは階段が崩れ落ち、あるいは瓦礫が邪魔で通れない。松明に導かれるように残った道を進んでいく。皆が警戒しているのは空気で分かった。

次に出た場所は長い通路。敷かれた真紅の絨毯は色あせ、くたびれている。天井にはかつてシャンデリアだったものが吊り下がっており、石柱の間から光が漏れていた。



やがて歩き続けていた一行の足が止まる。広がっていた光景にルインたちは思わず息を飲んだ。

「ここは……!?!」

目の前に広がっていたもの。それは地の底まで届かんばかりの奈落。赤黒い闇が渦巻いており、とても直視出来ない。嫌悪感が込み上げてくる。悪趣味もいいところだ。そう、あの《白面》のようだ。ルインだけではない。皆の表情も嫌悪に歪んでいた。

「地の底に続く縦穴……。なんて大きさなのかしら」

「ここからの目測だと深さ五百アージュって所か。やれやれ……。こいつは骨が折れそうだけだぜ」

灰色の髪の少女が呆然と呟くと、青年はため息をついて奈落を見つめる。底は見えず、瘴気が渦巻いたまま。正に地の底まで続かんばかりの穴はかなり深い。覗き込んでもとても下までは見通せなかった。

青年の言う通り、ルインの予想も五百アージュ（メートル）である。下るにしてもかなり時間が掛かるだろう。

とその時、同じように穴を見ていたロイドが気づく。先程から沈黙しているティオの顔色が悪いことに。

「ティオ、どうした？」

「大丈夫？ 真っ青な顔してるわ」

灰色の髪の少女もティオを気遣うような視線を向ける。彼女の顔色は悪く、蒼白と言っている。今にも崩れ落ちそうなほどである。

少女の足は小刻みに震え、握りしめた手も震えていた。

だがティオは嫌な考えを振り払うように首を振ると、平静を装って答える。

「……問題ないです。ただ、昔いた場所のことを少し思い出してしまつて……」

「昔いた場所……そうか」

「共和国の西端にあつたつていう連中の拠点のことだな？」

合点が行つたようなロイドと青年だが、ルインには全くもつて分からなかつた。共和国の西端にあつた連中の拠点や『ティオ』が昔いた場所についても。

これは夢なのか、それとも別の何かなのか。少なくとも『ルイン』には未来を視る力はない。頷いたティオは、ゆっくりと自らの推論を述べる。

「……………はい。たぶん、この縦穴は《煉獄》に続く黄泉路を見立てて建造されたんだと思います。女神を否定する概念としての悪魔に近づき、利用するため……そして彼らに供物を捧げる《儀式》を執り行うために」

彼女の話ではこの奈落は《煉獄》に続く黄泉路。それを模したものの。女神を否定する概念としての悪魔。そして供物、儀式。《煉獄》や《悪魔》は聖典に登場するそれを指しているのだろうか。

何も知らない、分からないはずなのに胸が騒ぐ。そう、知っている気がした。何を？ 分からない。考えれば考えるほど分からなくなり、深みにはまっていくなうだ。

唯一分かるのは、自分<sup>ルイン</sup>が彼らに対して信頼を寄せていること。

「……最低の連中ね」

「ハッ、道理で辛気臭い匂いがするわけだ」

「趣味が悪いのね。まるであの人みたい」

目を伏せ、吐き捨てるように言う少女に、皮肉めいた笑みを浮かべる青年とルイン。趣味の悪さはルインが知るある人物を思い起こさせる。《教授》、あるいは《白面》と呼ばれていた。

今のルインの声から感じられるのは嫌悪だけで憎しみではない。まるで全てを吹っ切ったようなどこか余裕のある声。

ロイドは皆を見回し、そして……。

「……だったら俺たちの仕事は一つだけだ。俺たちの道を拓いてくれた人たちのためにも。そして俺たちの帰りを待っているあの子のためにも……その辛気臭い幻想を叩き壊して陽の光の下に引き摺り出してやる！ もう誰も、辛くて哀しい思いをしなくて済むように……！」

ロイドが発した声は決して大きなものではない。

しかし心の中にすんと落ちてくる。帰りを待つあの子、とは誰のことなのか。

もう誰も、辛くて哀しい思いをしなくて済むように。その言葉に『全て』が込められているような気がした。

それでも今のルインにはその『全て』が分からない。どんなに記憶を探っても出てこないのだ。だと言うのにこの焦燥は何なのか。忘れてはならないと本能が警鐘を鳴らす。

「……ロイドさん……」

「まったく熱血野郎と言いたところだが……ま、今回はかりはそいつに一枚乗らせてもらっぜ！」

「ふふ、私も乗った。敵は、全てを影から操っていた得体の知れない蜘蛛のような存在……。でも今の私たちならきつと届くことが出来るはずよ」

テイオが嬉しそうにロイドの名を呼ぶと青年は頭を掻きながら苦笑し、満面の笑顔を浮かべる。少女も笑みを漏らし、仲間たちに視線を向けた。

今の自分たちならきつと届くことが出来るはず、と。

「……はい。絶対に……負けません！」

「どんな相手だろうと、叩き潰せばいいだけ。辛くて哀しいのはもう嫌だから……！」

ルインの手は愛用の刀に添えられた。義父の形見の品。相変わらず傍観者で、自分の意思では動かせないが、手に馴染んだ刀の感触は同じ。

義父が隣にいてくれると思えば、何も怖くない。怖くないはずなのに、得体の知れない不安に襲われる。これは紛れも無い恐怖だ。

「よし……それじゃあ行こう。クロスベル警察・特務支援課所属、ロイド・バニングス以下五名　これより事件解決のため強制潜入を開始する……！」

ロイドの声を最後に薄れゆく意識。視界は黒に染まり、もう何も見ることが出来ない。なのに、突如として聞こえた幼い少女の声。

姿も見えない少女は何かを言っている。

何故かその声を聞き逃してはならない気がした。すると、闇の中に現れた幻影。まだ十歳にも満たない少女である。鮮やかな緑の髪を持つ彼女は目を閉じ、悲痛な声でこう言った。

叶わぬならば、全てを。

## prologue (後書き)

最初って書くと意外に長いですね……！そして不完全燃焼です……。  
もっと上手く書きたいんですがこれが限界でした。

## 緋色の青年

誰かの声が聞こえた気がした。浮上する意識。ゆっくりと瞼を開けば、太陽の光が眩しい。

真っ先に目に飛び込んで来たのは開きかけの本と机。どうやら本を読んでいる内に眠っていたようだ。何か大事な夢を見た気がする。それなのに何も思い出せなかった。どんなに思い出そうとしても、だ。

本を閉じ、夢の内容を思い出そうとしていると、一階から聞き慣れた声が響く。

「……ルイン、そろそろ時間でしょう？」

「大丈夫、もう行くわ。母さん」

声の主は義母で、中々降りてこない娘を心配して声を掛けたようだ。ルインは今日からクロスベル警察で働くことになっていた。

乱れた髪を手ぐしで整えて立ち上がる。時間に余裕はあるが、初日から遅刻では洒落にならない。部屋を出ようとして、鏡の前で立ち止まる。

鏡に映っているのは若い少女だ。長く艶やかな髪は天空を思わせる蒼　ヘブンリーブルー。長い睫毛に縁取られた淡い紫色の瞳が鏡の中からルインを見返していた。

ここ何年かの間に見慣れた自分の顔。昔は鏡を見ることもなかったため、鏡を見る、という行為にもまだ慣れない。

鏡の中の『ルイン』は冷たい表情をした美しい少女だった。それを見て思う。

『……まるで人形みたい』

目を伏せて腰に差した刀に触れる。黒塗りの鞘に納まったそれは今は亡き養父の形見。遊撃士<sup>ブレイサー</sup>であった父の物だ。

瀕死の重傷であった自分を助けてくれ、あまつさえ実の娘のように育ててくれた両親には感謝している。彼らがいなければルインは『人間』にはなれなかったし、間違いなくあの時に死んでいただろう。

「ルイン？　どうかした？」

「何でもないの」

母の声に思考を中断し、部屋を出て階段を降りる。母を見たルインの顔が自然と綻んだ。養母エレインは四十歳を前にしても色褪せない美しさを持つ女性である。若い頃は養父グレンと同じ遊撃士<sup>ブレイサー</sup>だったらしい。

見た目はたおやかで、とても荒事に向いているとは思えないが、彼女が見た目通りでないことは娘であるルインが一番よく知っていた。

「嫌な夢でも見たの？　少し顔色が悪いわ」

「平気。それにどんな夢だったか覚えてないから」

エレインは優しい手つきでルインの頬に手を添える。今、自分はちゃんと笑えているだろうか。

昔は酷くうなされたことがあった。ルインが『何』であったか、エレインは知らない。一度として聞かれたこともなかった。生死の境をさまようほどの大怪我を負っていた身元も分からぬ自分を介抱



してくれた両親。

ルインが以前、身をおいていた世界はエレインからすれば考えられないものなのだろう。両親はルインに人の温もりを教えてくれた、人間にしてくれた。

だから分かってしまった。人の痛みを、悲しみを。知らなかったでは済まされない。無知は罪なのだ。

だからこの業は自分が背負うべきものであつて母には関係ない。

「行つてきます、母さん。……父さん」

すつと足を引き、エレインから離れる。玄関の扉に手を掛けると、母と、写真の中で微笑む父に挨拶をして家を出た。

すぐに前を向いて歩き出したルインは知らない。エレインが悲痛な表情で自分を見送ったことに。

「……駄目ね、わたし。あの子の母親失格よ、あなた」

家を出たルインはその足でクロスベル警察に向かう。交易都市クロスベル。ここ数年で目覚ましい発展を遂げたクロスベルは、昔とは比べものにならないくらい華やかになっていた。

ルインは歩きながら白い封筒を取り出す。中に入っていたのは一枚の紙である。所謂辞令だ。

白い紙にはこう書かれていた。

ルイン・アスール殿

特務支援課への配属を命ずる。指定日時に警察本部へ出頭せよ。

クロスベル警察・人事課

書かれた字を目で追って、再び仕舞う。

「特務支援課、ね……」

クロスベル警察に特務支援課は“存在しない”。気になって調べたのだが、どうやらセルゲイという警部によって新設される部署だという。

クロスベルは幾つもの区画で別れている。ルインの家があるのは東通りで、警察は湾岸区の隣、行政区にあった。クロスベルに住んでいても、ルインが警察を訪ねたのはほんの数回。

ルインは警察本部を一瞥し、足を踏み入れる。灰色と青で統一された警察内は落ち着きのある佇まいをしており、清潔感に溢れていた。

受付からは待ち合いが見渡せるようになっており、万が一おかし

な動きをする者がいれば直ぐに分かるようになっていた。

しかし受付に居るのは女性一人だけ。まだ少女と言っても差し支えないだろう。薄紅色の髪を二つに結わえた活発そうな彼女だけで、他は見当たらない。仕方なく近づいて声を掛ける。

「わたしはルイン・アスール。本日付けで特務支援課に配属になりました。セルゲイ警部はいらっしゃいますか？」

ルインが話しかけても少女は無言だった。瞬きもせずじっとルインを見つめている。何かおかしな所でもあったのだろうか。

そんな少女を訝しげに見返していると、我に返ったのか彼女は慌てて駆けて行った。

「あ、は、はい……！ セルゲイ警部ですね。少々お待ちください！」

一人残される形になったルインは、彼女が戻るまで待つしかなかった。壁に掛けられてある時計を見上げる。定刻より早いが早すぎるということはない。

ドアが開く音に玄関の方を一瞥すると、オレンジのジャケットを羽織った青年がこちらに歩いて来た。

年の頃は恐らくは二十代を僅かに過ぎたところか。端正な顔立ちをしているが、見るからに遊び人といった雰囲気を感じている。

切れ長の瞳は若葉よりも濃い深緑。肩より少し長い髪は燃え盛る炎を思わせる鮮烈な赤で、後ろで適当に結んで背中に流していた。

青年は受付に誰もいないことに気づいたのか、緑色の目を細めている。

「何だ。誰もいないのか？」

一瞬、重なつた。青年の面差しが、血と埃に塗れたあの場所で見  
た誰かに。

だが果たしてそれが誰であつたか。何より気になるのは彼が纏う  
雰囲気。明らかに戦い慣れたものの『それ』だ。場数を踏んだ、  
いや、そんな生半可なものではない。修羅場を潜ってきた、と言え  
ばいいだろうか。

殺伐とした世界に身を置く者はどんなに巧妙に隠しても、隠し切  
れない匂いがある。ルインも同じだ。だからこそ分かつた。

青年も見られていることに気づいたのか、彼の視線がルインに向  
く。青年の方が頭一つほど背が高いため、ルインが見上げる形にな  
つた。ルインを見た彼が口を開きかける。

だがそれはやって来た男の声に遮られた。

「お、来たな新人ども」

「お、お待たせしました……！　こちらがセルゲイ警部です」

男の後ろからひよっこりと薄紅色の髪の少女が姿を見せる。ルイ  
ンの前にいるのは無精髭を生やした壮年の男だ。撫で付けられた黒  
髪に同色の瞳。赤いネクタイに、シャツの袖を半ばまで捲り上げて  
いた。

ただ、漂う倦怠感とやる気のなさはどうにかならないものか。  
彼はルインと青年を一瞥すると、やる気なさそうに名乗った。

「特務支援課課長、セルゲイ・ロウだ。お互い、自己紹介は後でな  
付けて来い。他の連中が来るまでそこに突っ立ってる訳にはいかん  
だろ」

特務支援課課長、セルゲイ・ロウ。手短に自己紹介を済ませた彼は言いたいことだけ言うと、さっさと行ってしまふ。残されたルインも青年を放って歩き出す。セルゲイがお互い、と言ったことからどうやら彼も新設される特務支援課のメンバーなのだろう。

正直な所、関わりたくないのだがこれからそうも行くまい。向こうが気づいていないのなら、それはそれでボロを出さなければいいだけだ。

その時、躊躇いがちに投げ掛けられた声。声の主はセルゲイを呼んで来てくれた少女だ。

「あ、あの、ルインさん。頑張ってくださいね」

「ありがとう」

立ち止まり、振り返って微笑めば少女は頬を赤く染めて、ルインから視線を逸した。自分の容姿が中々であることをルインは理解している。こうして微笑めば大抵の者は騙されることも。笑いたくなくても笑えるのは、出来れば思い出さたくない、だが忘れてはならない過去が影響していた。演じるのは得意だ。

歩き出したルインの隣に、追いついてきた青年が並ぶ。何を思ったのか、へらりと笑って親しげに話しかけようとする青年だが、

「ま、お互い、自己紹介は後でするとしてだな。お、おい……ちょっと待ってって」

ルインはその言葉には答えず、歩く速度を上げる。こちらとしてはお近づきになりたいわけではない。軽く無視をしてセルゲイについて行く。彼が誰であるか確信がある訳ではない。

だが只者ではないことは確かだ。流石に執行者たちには及ばない

だろうが、彼が纏う<sup>オーラ</sup>気配は普通とは違う。そして何気ない動作が草が滑らかだ。おまけに底の厚い靴を履いていても足音は一切しない。

もっとも、彼がルインを警戒している様子はなかったが。

彼は素っ気ないルインの態度にもめげずに色々と話しかけてくる。適当に答え、あるいはかわして歩を進める。ここまで来ればフランクを通り越して馴れ馴れしい。不快ではないが、一々相手をするのが面倒だ。

セルゲイに案内された場所は、会議室のような広い部屋だった。長い机に椅子。ホワイトボードには何枚かの紙が貼り付けられている。

だがセルゲイは二人を案内すると、適当に座れと言って部屋を出て行ってしまふ。仕方なく椅子に座って待っていると、暫くして入って来たのは二人の少女だ。一人はルインと同じ年頃だろう。

長い灰色の髪に後ろで結ばれた黒のリボン。整った顔立ちをしているが、警官にはとても見えない。どちらかと言うと良家の息女と言った佇まいか。磨き上げられたペリドットを思わせる緑の瞳は窺うようにこちらを見ている。

そんな彼女の後ろにいる少女は、まだ十代の半ばに達していない。頭の上で二つに纏められた水色の髪に、長い睫毛に縁取られた瞳は美しい金色。

少女は灰色の髪の彼女を追い越すと、無言で椅子に腰掛ける。愛らしい顔立ちをしているが、纏う黒衣と浮かべる表情のお陰で、その年頃の少女が持つ雰囲気は微塵も感じられなかった。



## 緋色の青年（後書き）

ランディしか出せませんでした……！次こそはロイドたちを！



## 若すぎる同僚たち

「こんにちは」

灰色の髪 of 少女は黒衣の少女の隣に腰掛け、にこりと微笑む。赤毛の青年が挨拶を返すと、ルインも彼に倣った。ここで印象を悪くしても一緒に働きづらいだけだし、わざわざ挨拶を返さない理由はない。

それにしてもセルゲイが戻る気配はまだなかった。それは自分たち以外にもメンバーがいるから、と考えるのが自然である。

青年や少女たちは何をしているのかと一瞥すると、隣に座る青年と目が合った。何故かにこり、と笑われるが、愛想笑いをして視線を逸らす。

水色の髪 of 少女は自分以外のメンバーに関心がないのか、考え事をしてしているらしい。灰色の髪 of 少女はと言うと、ルインを見てふわりと笑いかけた。

「ねえ、あなた。私と同じ年くらいかしら？」

「……自己紹介は後だと、セルゲイ警部が言っていたはずですが？」

少女の言葉にルインが答えようとした直後、冷ややかな声が被せられた。

声の主は勿論、あの黒衣の少女である。正確には名乗ってすらいないため、自己紹介、ではないだろう。

しかしそんな彼女に気圧されたのか、少女の笑みが僅かにひきつっていた。

「そ、そうだったわね。ごめんなさい」

「ま、まあ、そんな細かいことはおいといてだな……」

慌てて青年が間に入ろうとした時だ。近づいてくる足音と気配にルインと彼らの視線が一齐に扉に向く。

暫くしてセルゲイに連れられ、一人の少年が入室した。歳は十代後半。落ち着いた雰囲気を漂わせる少年だ。鳶色の髪に同色の瞳。顔立ちは整ってはいるものの、派手さはなく周囲に埋没してしまっている。そうだ。

黄色のタートルネックの上に、白のジャケットを羽織っている。首から下げたドッグタグが照明を反射して、ちかり、と煌めいた。

「あら……」

「おっと。おいでなすったようだな」

少年を見て灰色の髪の少女と青年が同時に声を上げた。そしてルインも僅かばかり驚いていたのだ。それは少年も同じようで、ルインを見た彼は驚きに目を見開いている。

セルゲイに促された少年はルインたちの前に立った。

彼　ロイドはルインと同じ警察学校で学んだ学友である。それほど親しい仲ではないが、付き合いが悪かったということもない。真面目で品行方正。優秀な成績で卒業した彼も、確か捜査官の資格を取ったと風の噂で聞いた。

ルインも同時期に受験して資格を取ったのだが、それきりで会っていないかったのだ。久しぶり、とまではいれないが、ついこの間会ったとは少し違う。

「待たせたな。こいつが最後のメンバーだ。おい、自己紹介」

「あ、はい」

セルゲイによるとロイドが最後のメンバーだという。ならば特務支援課はこの五人だけ。促されたロイドは何やら考え事をしているのか、一向に口を開かない。

だが彼が戸惑うのも無理はないだろう。

ルインを含めてこの場にいる者たちは皆若い。所謂新人と言っても過言ではないだろう。実際、ロイドとルインは捜査官の資格を持っているとは言え『新人』で、黒衣の少女は言うまでもない。

赤毛の青年は五人の中では一番の年長者だろうが、これまでの態度と感じた気配を考えると、ルインも心中穏やかではいらなかった。

「おい、どうした？ 名前と出身だけでいい」

「す、すみません。 ロイド・バニングス。ここクロスベル市の出身です。しばらくの間、外国で暮らしていたんですけど……この度、警察に入るにあたり戻ってくるようになりました。これから直しくお願ひします」

セルゲイは怪訝そうな顔でロイドを見つめている。その声で我に返ったロイドは慌てて謝り、丁寧に自己紹介をした。

「おーおー、真面目だねえ。俺はランディ。ランディ・オルランドだ。趣味はナンパ、ギャンブル、グラビア雑誌の鑑賞って所だ。あとでお前さんには俺の秘蔵コレクションからおきを貸してやるよ」

「ええっ……!？」

ロイドの自己紹介を聞いて赤毛の青年が笑う。そして彼も名乗った。ランディ・オルランド、と。

ルインにはその後の言葉などまるで耳に入っていなかった。戸惑うようなロイドの声も。初めて見た時、見覚えがあったのは当たり前だ。

ルインと彼は一度会っている。勿論、街ではない。血と埃に塗れた戦場で。もつとも、彼は覚えていないだろうが。いや、覚えていたとしても分かるまい。

「赤い星座……」

「え？」

ルインの呟きにランディが振り向く。しかし何を言ったのかまでは聞こえなかつたらしい。ルインは以前、身喰らう蛇ウロボロスという組織で執行者候補とされた存在だった。その時に聞いたことがある。

獵兵団《西風の旅団》と敵対する大陸西部最凶の獵兵団である《赤い星座》。

今はランディ・オルランドと名を変えているようだが、彼はその赤い星座の団長の息子であり、《鬪神の息子》の二つ名で呼ばれたランドルフ・オルランドに違いない。そう、あの赤き死神と恐れられた。

しかし何故《鬪神の息子》がここにいいのか、皆目見当がつかなかった。そもそも獵兵団とは、傭兵部隊の中でも特に優秀な部隊を指して使われる称号である。

規模や目的に応じた柔軟な契約が行えることから、私兵として使

われていることも多く、運用を禁じている国もある。何か目的があつてこの場にいるのか、それとも勘ぐり過ぎだろうか。

「……コホン。初めまして。エリイ・マクダエルです。あなたと同じクロスベル市の出身です。よろしくお願ひしますね」

「あ、ああ……」

そんなルインとは裏腹に自己紹介は続く。灰色の髪の少女は大きく咳払いをすると、自らをエリイ・マクダエル、と名乗った。もしや彼女はクロスベル市の市長にして、クロスベル自治州政府代表の一人であるヘンリー・マクダエルの縁者なのだろうか。勿論、同姓だけで何の関係もない可能性もある。

「ティオ・プラトー。レマン自治州から来ました。……よろしく」

黒衣の少女はティオ、と名乗って頭を下げる。笑えばさぞ愛らしい少女なのだろうが、抑揚の無い声と、浮かべる表情からそれはほど遠い。

見たところ十代半ばほどだろうが、その年頃の少女が持つ雰囲気は一切感じられなかった。一方ロイドも次々と名乗る同僚たちにとっにか返事をしている。

「よ、よろしく……」

「ルイン・アスールと言います。彼と同じ警察学校出身です。以後お見知りおきを」

最後はルインだ。ここでこれ以上、考えても無駄である。作り笑いを浮かべ、名乗る自分は彼らにどう映っているのだろうか。

ロイドの方は少なからず驚いているようで、エリイは好意的に見てくれているようである。ティオは相変わらず感情が読めず、ランディは小さく口笛を吹いた。

「ひ、久しぶり……。えっと、セルゲイ課長……？」

「ん、なんだ？」

「『特務支援課』というのは一体どういう場所なんですか？ その……自分も含めてずいぶん若い顔触れのような」

どうにか笑みを浮かべたロイドだが、途端に真剣な表情になって尋ねる。そもそも『特務特務支援課』とは何なのだ。ルインも新設される部署であるとしか知らない。

だが新設される部署にしてはメンバーが若すぎる。ロイドとルインは十八歳だし、恐らくエリイも同じくらいだろう。ティオに至ってはどう見ても十代半ばである。ランディも二十代を僅かに過ぎたところだろう。

「ま、色々あったな。ちなみに全員、お前と同じく期待のルーキーばかりだ。クク、気楽でいいだろう？」

「は、はあ……」

「……いいのかしら」

気楽でいいだろう、と笑うセルゲイにロイドはどう返事をしてい  
いか分からず、エリイも不安そうな顔で呟いている。気楽は気楽だ  
ろうが、五人でしかも皆が新人というところが何か引っかかる。

「……余程特殊な事情のようですね」

「ま、口やかましい先輩がいないってのは有難いねえ」

セルゲイはルインの言葉に答えず、ただはぐらかすように笑っているだけ。ランディは嬉しそうだし、ティオはと言えば無言。その色々あった、は本当に色々あったのだろう。

正直嫌な予感しかないが、どの道ルインには選択肢はないのだ。

養父が死んでから、ルインはただ一つだけを目指して走ってきた。捜査官になって誰かを助ける仕事にしても、全てが赦されるとは思わない。かつて自分が犯した罪は重い。

だが養父のようになりたかったのだ。誰かを守れるような人間に。その時、ルインの思考を遮るように甲高い音が鳴り響く。

「こちらセルゲイ……おお、ご苦労さん」

懐から何かを取り出したセルゲイは、その何かに向かって話しかけている。ルインからはよく見えないが、携帯用の情報端末だろう。遊撃士協会や警察に設置されているものを更に小型化したもので取り付ける必要はなく、持ってさえいれば連絡が取れるという優れものだ。

良い事でもあったのだろうか。通信を切った彼は悪役さながらの笑みを浮かべたのだった。

「……ああ、了解だ。それじゃあ後始末の方は任せてくれ。よし、喜ベルキーども。この『特務支援課』がどんな仕事をするのか……これから素敵な場所ですっきりと体験させてやろう」





**若すぎる同僚たち（後書き）**

ここまで書くのに時間かかりすぎました。

## 実戦テスト

クロスベル警察を出たルインたちは、黙ってセルゲイの後に続く。広場を抜け、たどり着いたのは駅前通りの外れ。

怪訝そうな顔をするルインたちには構わず、セルゲイはさっさと歩いて行った。

「ここは……」

「駅前通りの外れ……一体、何があるのかしら？」

思わず呟くのはロイドとエリィ。確かルインの記憶が正しければ、この先にあるのはクロスベル市の地下に広がるジオフロントの入口だったはず。

どうやら何となく察しがついたらしいランディは、呆れたような顔で眼下を見つめている。

「後始末とは言ってたが……まさか資材を片付けるとか言っんじゃないだろうな？」

そんな彼らに対して、ティオは黙ったまま。一言も喋ろうとはしない。喋べる気がないのか、はたまた喋べる必要もないと判断したのか。

ルインも特に何も言わず、階段を降りて行く。視線だけは前を歩くランディから逸らさぬまま。

「ここから先は、クロスベル市の地下に広がる『ジオフロント区画』になる。今から、この中に潜ってもらおう」

鉄の扉を背にしたセルゲイはとんでもないことを口にした。鈍い灰色に、黒と黄色の線が入った扉は関係者以外立ち入り禁止、ということに他ならない。

潜ってもらう、抑揚のない声音で言っただけのセルゲイに、ロイドとエリイが同時に声を上げた。

「ええっ!？」

「も、潜るって……」

「おいおい。どういうことッスか？」

「テスト代わり、と言う訳ですか。初めは差し詰め、面接代わりで？」

眉を潜めるランディを一瞥し、ルインはセルゲイに視線を移した。新設される特務支援課に集められたメンバー。皆がルーキーである。実績があるはずもなく、かつ役に立つかどうかも分からない。実戦と訓練は似ていても全く別物だ。

「どんなに訓練の成績が良くても、実戦で役に立たなければ何の意味もない。」

手っ取り早く、使えるか、それとも使えないか判断するには実戦が一番だ。

加えてこの五人の相性を見るためでもあるのだろう。たった五人の部署である。何より連携が大事にされるはず。

ルインが問うと、セルゲイはあっさりと認めた。

「その通り、これはお前たちの総合能力、および実戦テストのためだ。ジオフロント内部はそれほど手強くはないが魔獣の類いが徘徊

している。それらを掃討しながら一番奥まで行ってもらう」

ルーキーのテストにジオフロントはうってつけということだ。

だがやはり気になるのはセルゲイが言った後始末、とそして特務支援課の仕事、との言葉。新人ばかりが集められ、新設された部署にまともな仕事があるはずもない。

「……なるほど」

「実戦テストか。ま、それなら気が楽かね」

エリイもランディも納得したようだが、ルインは到底笑えなかった。特務支援課の仕事、が予想出来てしまったから。本来、魔獣の掃討は捜査官の仕事ではない。

やはりロイドも気付いたのだろう。慌てたように声を上げる。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ テストはともかく……どうして魔獣が徘徊する場所にわざわざ入る必要があるんですか？ 警備隊じゃあるまいし……捜査官の仕事じゃないですよね？」

それは捜査官ではなく、警備隊の仕事だ。そもそも捜査官には必ずしも“強さ”は必要ないのだ。

警察学校で習ったのも犯人の確保や制圧に関することであって、魔獣と戦うことではない。

しかしセルゲイもロイドの答えなど予想していたのだろうか。意地の悪い笑みを浮かべている。

「クク、確かに普通は捜査官の仕事じゃないだろう。だが、特務支援課に所属するメンバーは話が別だ」

「え……」

「詳しい説明は後だ。まずはコイツを受け取れ」

よつは聞くな、さっさと行け、ということらしい。セルゲイは瞬く間に会話を切り上げると、何かを取り出してルインらに手渡した。硬質な輝きを放つ金属の塊。セルゲイが使っていた携帯端末に似ている。懐中時計よりも少し大きいそれは、ルインにとって馴染みのあるものだった。

「これは……」

「新型の戦術オーブメント？」

手渡された物を見て、ロイドとエリイが驚いたように口を開いた。一見すると金属の時計のように見えるが時計ではない。

そもそもオーブメントとは神秘のエネルギー『導力』によって動く機械の総称。

現在では照明から通信、兵器に至るまで様々なオーブメントが開発されている。その中でも戦術オーブメントは結晶回路クォーツと呼ばれるセピス　七耀石の欠片から作られたものを組み込むことで、魔法アーツを操ることが出来た。

その七耀石にも地・水・火・風・時・空・幻と七つの属性が存在し、スロットにセットする結晶回路クォーツによって、回復や防御など様々な魔法アーツを使用することが出来るのだ。

あくまで戦術オーブメントを用いた魔法であるため、オーブメントさえあれば誰でも魔法　オーバルアーツの使用が可能だ。

「へえ……ずいぶん洒落たデザインだな」

「第五世代戦術オーブメント、通称ENGMエニグマA……ようやく実戦配備ですか」

「確かより強力になった新魔法アイツを発動出来る上に、通信機能も搭載しているようですね。ただ中継ターミナルの問題で、普及にはまだ至っていないようですが。実地テストと言う訳ですか」

ランデイがひゅう、と口笛を吹けば、オーブメントを見たティオが目を細める。勿論、ルインも知っていた。

第五世代戦術オーブメント、通称ENGMエニグマA。以前の懐中時計のようなものからデザインも変更されているが、それだけではない。

より強力になった新魔法を発動出来る上に、小型の携帯端末としても使用出来る。

しかし携帯端末として使用するには、中継ターミナルの問題があった。とても高価であるために未だ大陸全土には普及していない。

今回はさしずめ、実地テストということだろう。データを取るのならば警察や遊撃士協会が最適だからだ。

すらすらとENGM Aの特徴を口にしたルインに、ティオはほんの少しだけ驚いているようだった。

「……随分詳しいな。ああ、財団の方から先日届いたばかりの新品だ。お前たちの適正に合わせて既に調整もされている。使い方はティオ。お前がレクチャーしてやれ」

セルゲイの言う財団とは、オーブメントを発明した天才導力学者C・エプスタイン博士の業績を受け継いだエプスタイン財団のことであり、戦術オーブメントを開発している唯一のメーカーでもある。ただ戦術オーブメントには個人の適性も関係するため、スロット

の数や配置などが異なる場合が多い。

しかし既に調整も済んでいるとは随分と用意がいいものだ。

「……面倒だけど了解です。新型用の結晶回路クォーツはありますか？」

「ああ、少ないが受け取れ。それと肝心のこいつだ」

手渡されたのは、宝石のように色とりどりの結晶回路クォーツと金属の鍵だった。ジオフロントの鍵だろう。

オーブメントは個人の適正に合わせて調整されているが、開封されているスロットは一つだけ。つまり結晶回路クォーツを一つしかセット出来ないのだ。

より多くの結晶回路クォーツをセットすることによって強力な魔法アーツを使用出来るため、今の状態ではごく簡単な魔法を使用出来る程度だろう。

「それじゃあ、一通り魔獣を掃討したら本部に戻って来い。細かい話はその後にしてやろう。おっと ついでにこいつも渡しておくぞ」

セルゲイは懐から取り出したものを投げて寄越すと、ルインたちを置いて歩き出す。

慌ててロイドが受け止めたそれは一冊の手帳だった。クロスベル警察のエンブレムが描かれていることから捜査手帳だろう。

「ちょよ、ちょっと課長!？」

「ああ、それとロイド。とりあえずお前、リーダーな」

セルゲイを呼び止めようとしたロイドだが、彼の口から出た思わぬ言葉に文字通り固まった。へっ、と間の抜けた声を漏らして目の

前の『課長』を見つめている。

ちなみにルインはわざとらしく視線を逸らしていた。

「今の所、捜査官としての正式な資格を持っているのはお前とルインだけなんだよ。ルインが嫌だって言う訳でお前、リーダーな。それじゃあ任せたぞ」

この中で正式な捜査官の資格を持つのはロイドとルインだけ。そもそも今回、捜査官の試験を受けて受かったのはロイドとルインの二人である。エリイとテイオはどう見ても捜査官には見えないし、ランデイも恐らく違う。《闘神の息子》が捜査官の資格を持っているとは考えづらいからだ。

そうなればリーダーを任されるのはどちらかになるだろう。ルインはともリーダーなんて柄ではないし、ロイドの方が適任だ。そんな訳で、ここに来る間にセルゲイに耳打ちしておいたのである。

リーダーなら彼の方が適任だと思います、と。



## 不釣り合いな少女

突然リーダーを任されたロイドは呆然としていた。少し罪悪感を感じたが、彼の方が適任だろう。

全体を見る目はまだしも、他の者を気遣うと言う点ならば、ロイドの方が秀でている。リーダーなどルインの柄ではないし、彼より他に相応しい者はいない。

「ハツハツハ。押し付けられちまったなあ？」

「ふふ、でも捜査官の資格を持っている人が二人もいて心強いです。ロイドさん、よろしくお願いしますね」

ランディが歯を見せて笑うと、エリイは思わず笑みを漏らす。少しだけ困った顔をしているが、ロイドもルインを責める気はないらしい。

「ルインはそうやってすぐに俺を押すから……。あ……。いや、呼び捨てでいいよ。見たところ歳も近いみたいだし」

「そう？　ちなみに私は十八だけど……」

呼び捨てでいい、と言われたエリイはロイドとルインの顔を見比べた。落ち着いた雰囲気や言動から、年齢よりも上に見られることが多いルインである。

やはりエリイもロイドやルインと同年齢だったらしい。彼女の笑顔も幾分か柔らかなものになった。同年齢だと分かったからか。

「私も貴女と同年齢だから」

「ああ、それなら同じ歳だ。えっと、あなたたちは……？」

ロイドの視線がランディに移り、そしてティオで止まった。少女の正確な年齢をはかりかねているのだろう。

いくら特務支援課が新設されたばかりだとしても、十代半ばほどの少女をメンバーに入れるだろうか。

だが、驚異的な童顔でもない限り、ティオの年齢と外見年齢は合致しているはず。

「俺は二十一だが、堅苦しいからタメ口でいいぜ。よろしくな、ロイド、ルイン、エリイ」

「ええ、こちらこそ」

「……よろしく」

タメ口でいい、と笑うランディは普通に見れば、気の良い兄ちゃんだ。

にこやかに笑うエリイに倣い、ルインも淡い笑みを浮かべた。ランディの真意が分からない以上、ここでおかしな態度は絶対に取れない。

不信任を抱かれるなんて面倒だし、真つ平御免である。

セルゲイがどこまで知っていて、彼を特務支援課に引き入れたのか分からないが、用心するに越したことはない。今はなんであれ、彼は“闘神の息子”なのだから。

「ああ、よろしく頼むよ。……えっと……それで、君の方は……？」

「十四ですが、問題が？」

ロイドが聞きづらそうに尋ねると、案の定、ルインにしてみれば予想通りの答えが返って来る。

普通に考えればテイオが自分たちより年上であるはずがない。…あの道化師ならば別だが。

テイオは何か文句でもあるのか、と言わんばかりの表情だ。ロイドの笑みがひきつる。

「い、いや〜。別に問題があるわけじゃ…って、十四歳っ!？」

あははは、と笑っていたロイドが突然、大声を上げる。

何度も瞬きし、信じられないものでも見るような瞳だ。まさか十四歳と返って来るとは思わなかったのだろうか。

一方、ランディは驚くどころか豪快に笑っていた。

「ハハ、なんだ。見た通りの歳ってわけか」

「驚いた…そんな若くて警察に入れるものなのね」

「いやいや! どう考えてもおかしいから! たしか一般の警察官でも十六歳以上だったはずだし…。日曜学校も卒業していない子がどうして警察なんか」

エリイは大体、ロイドと同じ反応らしい。

ロイドが言うように、警察官や捜査官には当然のことながら年齢制限がある。一般の警察官でさえ、十六歳以上だという決まりがあった。

どんなに優秀な人物であっても、十四歳では警察官にはなれない。

「テイオ、貴女は財団から派遣されたのね」

「……はい。正確に言うとなわたしは警察官ではないです。エプスタイン財団から出向したテスト要員ですの」

ルインの言葉を否定することなく、テイオは頷いた。エプスタイン財団では年齢に関係なく、優秀な者を起用するという。

それにセルゲイは言っていたではないか。戦術オーブメントを渡した後、テイオ、お前がレクチャーしてやれ、と。わざわざテイオを指名したのは、彼女がオーブメントについて知識を持つ者だから。

ロイドやルインは警察学校で一通り、戦術オーブメントについて学んだが、それはあくまで旧式のもので、第五世代戦術オーブメント エニグマについては学んでいない。

現在クロスベル市で進められている“計画”を含めると、彼女が財団の人間であるだろうと想像することが出来た。

明らかに十代半ばと思われる彼女が、捜査官とはとても思えない。ルインが予想出来たとしても、ロイドたちは別だ。ロイドはへつ、と戸惑っているようだし、ランディは不思議そうな表情を浮かべていた。

「エプスタインっていやあ、さっきの戦術オーブメントの……」

「そう……なるほどね。ここ数年、クロスベル市が財団と協力して大規模な計画を進めているのは聞いていたけど……」

頷くエリイも合点がいつたらしい。まだここ数年の話だが、クロスベル市と財団が協力して大規模な計画を進めている。

『導力ネットワーク計画』といい、端末同士を導力ケーブルで結

び、莫大な情報のやり取りと処理を可能にするものだ。

本来はリベール王国のツァイス中央工房との共同であったが、クロスベル国際銀行から資金提供を受け、クロスベル市への本格的な試験導入が始まっていた。

「『導力ネットワーク計画』ですね。そちらにも少しは関わっていますがわたしの出向目的は別にあります」

「でしょうね。いくら計画に携わっていても、警察に出向するはずがないし」

ルインも彼女が導力ネットワークのために特務支援課に来たとは思わない。

警察はネットワーク計画に関係はないし、それならばIBC（クロスベル国際銀行）に出向しているはずだ。

次にテイオが取り出したもの。それは金属製の杖だった。

「それは……」

「機械仕掛けの……杖？」

ロイドもエリイもまじまじとテイオが持つ杖を見つめている。恐らくはその杖が財団から派遣された理由なのだろう。

金属の杖に見えるが、ただの杖ではない。彼女がわざわざルインたちに見せたということは、特殊なものだ。

オーバルスタッフ

「魔導杖といます。この新武装の実戦テストのため、わたしは財団から出向しました。……ロイドさん。ご理解いただけましたか？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　もしかして……その杖を使って君

も戦うのか？」

「ご理解いただけましたか、とすました顔のテイオに対し、ロイドはひたすら狼狽していた。

杖とテイオを何度も見比ている。彼の気持ちも分からないではないが、歳と見た目で判断するのはテイオに失礼だろう。

「……捜査官の資格があるのに、ルインさんと違ってずいぶん察しが悪いんですね。『実戦』テストのために出向したと言いましたが……？」

「うっ……」

嫌味を言われ、目を伏せるロイドを見て、思わず笑みが漏れる。

警察学校時代から優秀だったロイドだが、抜けていることがあった。もっとも、それも彼の良さなのだろうが。

「まあまあ。ここでモメても仕方ないぜ。この先のジオフロントってのがどれだけ危険かは知らない……まずは、あのオッサンが押し付けてきた任務をクリアする事を考えようや」

そんなテイオを宥めたのはランディである。彼のいうことはもっともだった。

何にせよ、セルゲイが言う任務をクリアしなければ始まらない。ここで言い争っている暇はないのだ。

「そうね……納得できない事も多いけど」

「行動で示せ、そういうことでしょう？ なら、さっさと終わらればいい」

ふう、と息をついたエリイに、ルインは不敵に微笑む。

セルゲイの考えはまだよく分からないが、テストならば早く終わらせるべきだ。

ロイドもランディやルインが言いたいことが分かったらしい。テイオを見て、申し訳なさそうに謝った。素直に自分の非を認められるのは、ロイドの美点の一つだろう。

「……分かった。すまない、テイオ。気分を悪くしたら謝るよ」

「別に……あなたの反応は常識的だとは思いますが。ところで、わたしの武装はこの『魔導杖』ですが……皆さんの武装は何ですか？」

ジオフロントに入る前に、互いの武装を確認した方がいいだろう。テイオはテストのために魔導杖を使うのは分かる。

ロイドは警察学校で一緒だったため、知っているが、後の二人も見れば分かった。

エリイは腰のホルスターから、ランディも大きすぎるため一目瞭然である。

「ああ、それじゃあ 俺の獲物は、これだよ」

ロイドが構えて見せたのは、折り畳み式の武器である。

棒の端近くに握るための短い棒が取り付けられたもので、基本は二つ一組で使う。

警察官ならば馴染みと言ってもいい武器だ。ただ、一般人には馴染みのないものだろう。現にエリイは一瞬迷ったような顔をした。

「それは、警棒の一種……？」

「トンファーか。東方で使われる武具だな。殺傷力よりも防御と制圧力に優れているらしいが……」

「そうは言っても攻防一体の武器だから、対象の無力化に便利だし、使いこなせば強力よ」

一般人には馴染みのない武器だが、養父がカルバード共和国の間であるルインにすれば、珍しいものではない。そうでなくとも、武器については一通り、頭の中に入っている。

警察学校でもロイドと同じように、トンファーを選ぶ者は少なくなかった。

トンファーは突き出して攻撃するのは勿論、相手の攻撃を受け流すことも出来る。他にも長い部分を棍棒のように扱うことも出来るため、使いこなせたならば、対象を簡単に無力化することが可能だろう。



## 波紋を描くもの

「なるほど。警察官らしい装備ね」

「色々試してみたんだけどこれが一番しっくり来てね。ルインは知ってるとして、エリイとランディの獲物は？」

トンファーを見たエリイが納得したように頷く。防御と制圧力に優れた武器は確かに警察官らしいだろう。ロイドらしいとも言える。その点ではルインの武器は警察官向きではない。どちらかと言えば<sup>ブレイサー</sup>遊撃士たちが使う武器だ。実際、警察学校でもルインと同じ武器を選んだものは一人もいなかった。

警察学校時代からの付き合いであるロイドは、ルインの武器についても知っている。彼はトンファーを仕舞うと、エリイとランディに視線を向けた。

「私は……これね」

「導力銃……少し古いタイプですね」

「ずいぶん綺麗な銃だな……」

テイオとロイドが感嘆の声を上げる。エリイが腰のホルスターから取り出したのは、美しいフォルムを描く銀の銃。グリップは薄紅色をしており、いい意味でも悪い意味でも、とても戦闘に使うような銃には見えない。

よく見れば精緻な細工が施されているし、どちらかと言うと飾られているような銃だろう。古風な、とも言えるかもしれない。

そんな彼の心を読んだようにエリイが笑う。

「競技用に特別にカスタムしてもらったのよ。旧式だけど、狙いの正確さは期待してくれてもいいと思う」

「ええ、アテにさせてもらうから」

「おつ、自信満々だねえ。そんじゃあ、俺はコイツだ」

特別にカスタムして貰ったらしいが、確かに期待してくれてもいい、と言うだけあつてかなり使い込まれている。旧式だということも差し引いても、彼女の実力が分かるというのも。大体、その人物の実力は愛用の武器を見れば分かるのだ。特に導力銃はメンテナンスが大事である。旧式ならば尚更。アテにさせてもらうから、とルインが笑つと、エリイも任せて、と力強く頷いた。

そんな二人を見ていたランデイがルインたちに見せた武器。それは、

「それは……ずいぶん大きな武器だな」

「中世の騎士が使っていたハルバードみたいな形ね……」

ロイドは驚き、エリイもランデイの武器に見入っていた。ランデイの武器は正に、黒銀のハルバードそのもの。槍の穂先に斧がつき、反対側には小さな鉤状の突起がついている。ハルバードの語源は棒を表すハルムと斧を表すベルテからなるとされ、斬る、突く、叩くなど様々な使い方が出来るという。最強のポールウエポンと言っても過言ではない。

何通りもの使い方が出来るハルバードだが、その重さは勿論、使いこなすには相当な技量が必要とされることから、使い手は限られる。それを武器としていることから、彼の実力のほどが知れるだ

ろう。ただ、ルインの記憶が正しければ《闘神の息子》の武器はスタンハルバードではないはずだ。

「……財団の武器工房で見かけたことがあります。導力を衝撃力に変換するユニットがついていますね」

「ああ、スタンハルバードだ。ちよいと重くて扱いにくいが一撃の威力は中々のもんだぜ。で、ルインの武器は何なんだ？」

「……わたし？ わたしはこれ」

テイオの言葉に頷いたランディは、俯くルインに視線を向けた。ルインは彼の声でふと我に返り、下緒を外してロイド以外にも『それ』を見えるようにする。

黒塗りの鞘に納まったものを見て、ロイドを除いた三人はほお、と感嘆の溜息をついた。反り返った刀身が印象的な剣は刀、と呼ばれるものだ。鯉口を切って、僅かに峰を見せる。晒された刀身は美しい銀の波紋を描いていた。剣とはまた違った美しさがある。

銀の刀身を見つめていたランディが視線をルインに移した。刀の使い手の殆どはカルバードの者だが、彼女はどう見てもそうは見えない。

透き通るような青い髪と董色の瞳。カルバードの出身の者は黒や茶など濃い色の髪を持つ者が多いからだ。

「刀、か。折れず、よく切れる。で有名だが、使い手も少ない、だったか。だがカルバードの人間じゃないよな？」

「確かにそうは見えないけど……」

「養父がカルバード出身だったから。これは養父の形見」

エリイも緑の瞳を瞬かせてルインを見つめていた。

刀は強度と靱性を兼ね備えており、切れ味ならば普通の剣を凌ぐとされている。カルバードの剣士が扱う刀だが、使いこなすにはハルバード同様、技量が必要だ。

ルインは不思議そうな顔をする三人にその理由を語った。カルバードの出身だったのは養父の方で、この刀は養父の形見だということ。そして扱い方や手入れは養父から教わった、と。

養父はそれなりに名の知れた遊撃士<sup>ブレイサー</sup>だったが、そこまで詳しく言う必要はないだろう。刀身を鞘に納め、腰に戻す。これで一通り、情報交換も終わった。

ルインにしてみれば、さっさと与えられた実戦テストとやらを終わらせたいものだ。

「なるほど……。ティオの杖が、どういうものかは判らないけれど……魔獣との戦闘になったらバランスよく戦えそうだな」

「確かに……」

「ま、そのあたりも考えて俺たちを集めたのかもしれないな。あのオッサン、とぼけた顔して結構したたかそうだったし」

「曲がりなりにも『特務支援課課長』だから、じゃないの」

ロイドの言うように、このメンバーはバランスが取れていると言えよう。エリイも納得したように声を上げている。ロイドとランディ、ルインが前に出て、エリイとティオは後方からのサポートといった感じだろうか。ティオの魔導杖について詳しいことは分からない

いが、彼女が使い手ということから、少なくとも至近距離から攻撃するためだけの武器ではないはずだ。

セルゲイの考えは読めないことが多いが、その辺りはちゃんと考えたのか。ランディは結構したたかそうだった、と言うがルインも大体同じ考えだった。変わっているのは一見して分かったが、結構な食わせ者に違いない。

「……そうですね。わたしの魔導杖の性能はおいおい説明します」

「それじゃあ……とにかく中に入れてみよう。まずは安全に気を付けて進んだ方がよさそうだ」

何はともあれ、ここで話してばかりはいられない。ジオフロントに入ってみなければ始まらないのだ。準備は既に出てきているし、支給された戦術オーブメントも使い方は従来のものと殆ど変わらない。大きく変わったのはデザインと追加機能くらいだろう。

開封されたスロットには既に結晶回路クォーツがセットされているため、調整は必要ない。

「ええ、そうね」

「……了解です」

「んじゃ、行くとしますか」

「課長のご期待に沿えるように、ね」

この先にいるのは大した魔獣ではないだろうが、仮にもこれは実戦テストなのである。ルインは思ってもないことを口にする、冗談めかして笑う。

晴れてリーダーとなったロイドの言葉に皆が頷き、ジオフロントに繋がる扉を潜った。

ジオフロントA区画。鍵を開けた先に広がるのは鈍色の世界。金属の冷たさはあれど、温かみは一切なかった。頭上に設置されたオーブメントから十分な光が降り注いでいるが、この中にいると時間の感覚が掴めなくなりそうだ。

金属の床には赤いカラーコーンやドラム缶が無造作に置かれている。

最初は一本道であるため、迷うことはない。警戒を忘れずに階段を降り、先に進む。しばらく歩いてきた一行だが、開けた場所に辿りつくと、立ち止まって辺りを見回す。人の出入りが少ないためか少々埃臭い。

「ここが『ジオフロント』……」

「話には聞いていたけどこんな場所が都市の地下に広がっていたなんて……」

「は、たまげたな。中世の下水道あたりが残っている場所かと思っただが」

ロイドを始めとして、エリィとランディも驚きを隠し切れないようだ。例外なのはルインとティオで、三人が周囲を見回す中、そんな彼らを見つめていた。

いくらクロスベルに住んでいても、ジオフロントに入ることはずないだろうし、住民の殆どは地下にこんなものが広がっていると知らないはず。中世の下水道所の話ではない。金属に覆われ、オーブメントも設置されていることから、かなり新しいだろう。

三人の疑問に答えたのはテイオだった。

「データベースの記録によると二十年前の都市計画と同時に建造が開始された場所らしいです。上水道、下水道、ゴミ処理施設に加え、導力ケーブルや各種プラントなども後から設置されたようですね」

「ここ最近は何の出入りもないようだけど」

彼女がデータベースで調べた記録によると、二十年前に立ち上がった都市計画と同時にジオフロントの建造が開始されたらしい。ただの地下道ではなく、上下水道やゴミ処理施設を始めとして、様々なものが設置されているようだ。

ルインは金属の床を見つめた後、皆の方を振り返った。入り口からここまで歩いて来た感じだが、ここ最近は何の出入りもなさそうである。魔獣の糞などは落ちていたものの、掃除された形跡はない。カラーコーンやドラム缶が放置されていたことも考えると、魔獣にはほとほと手を焼いているのだろう。

「……いや、これは確かに予想外の場所だったかもしれない。しかし、この上はたしか中央広場あたりになるんだよね？ その地下に魔獣が徘徊しているのか……」

ロイドは天井を仰ぐ。勿論、そこにあるのは変わり映えのしない金属の天井だが。

恐らくこの辺りはちょうど中央広場。街の真下に魔獣が徘徊しているとはあまり穏やかではない。しかも人々はその事実すら知らない

いのだ。

「普段は封鎖されているため都市に現れることはありませんが……  
たまに工事現場の作業員の方々が襲われてケガをする事があるよう  
です。ですが現在、警察の方では対処しきれないようですね」

「……………そうか……………」

「緊急性も重要性もないからでしょう」

厚い金属の扉に阻まれ、鍵まで取り付けていることから、魔獣が  
市街に現れることはない。魔獣にとっても地下は湿気も多く、生活  
環境としても良いようで、ジオフロントから出ようとしないうよう  
である。

ただ、いくら人の出入りが少ないとは言え、ジオフロントは未だ  
建造中だ。修繕などでも作業員が出入りすることもあるし、彼らも  
気を付けてもそこは魔獣。逃げる、あるいは倒すにも限界はある。  
そうか、と呟くロイドにルインは少し呆れたように言葉を吐き出  
した。警察で対処しきれない現状。明らかに『捜査官』の仕事  
ではない。

地下道の魔獣退治など進んでする者はまずいないだろうし、魔獣  
というのは駆除が難しい。その生命力は凄まじく、倒しても倒して  
もどンドン湧いてくるのだ。まるで雑草や虫のように。

魔獣を一掃するにも手間と人手が必要である。

しかし駆除をするほど緊急性もないし、重要度も低い。何かが起  
こった時に対処しているだけに留まっているのではないか。そんな  
ことだからクロスベル警察は、と言われてもこの場合は仕方ないだ  
ろう。



「そのための特務支援課……ということかしら？」

「ま、それならそれで、判りやすくいいけどな」

まだセルゲイの意図が理解出来た訳ではないが、普通の部署では対処出来ない問題を解決する。エリイが言うように、それが特務支援課なのだろうか。

ランディは軽く笑って皆の方を見る。ただの実戦テスト、と言われるよりは確かに判りやすい。ただ、他の部署の後始末を押しつけられるような嫌な予感もしたが。

「状況は判った。捜査官の役目かどうかはともかく、必要な仕事であるのは確かみたいだ。テストであるかどうかは別にしてきちんとやり遂げておこう」

「おーおー、真面目だねえ」

「それが彼のいい所でもあるから」

どこまでも真面目なロイドを見て、茶化すように笑うランディ。いかにもロイドらしいと思う。例えばこれがテストではなくても、彼は手を抜かず、最後までやり遂げるだろう。警察学校時代と変わらない同級生に、思わずルインの頬も緩む。

真面目なのはロイドの良いところだった。真面目といっても堅苦しくもなく、冗談も通じる。優等生ではあるが、話の分かる彼なのだ。

「でも、確かにそうね。一つ一つ基本を確かめながら確実に進んでいきましょー」

「……了解です」

頷き、微笑むエリィにテイオも小さく首肯した。これまで魔獣の姿はなかったが、この先はそうも行かないだろう。焦らず、確実に進んだ方がいい。通路にしては広いとは言え、やはり狭いことには変わりはないし、魔獣と戦う時も位置取りが重要になって来る。

ロイドとルイン以外は初めて顔を合わせたのだから、息のあった動きはまだ無理。下手をすれば足を引っ張るかもしれない。一人で戦うことと皆で戦うことは違う。

ルインとて候補時代は単独任務ばかりだったし、警察学校で集団戦の実習はあったが、やはり勝手が違うのだ。

波紋を描くもの(後書き)

眠いです、非常に眠いです……！

## 初戦闘、そして

どうやらドアは自動らしい。金属製の扉の先には、細い通路が広がっている。鈍色の壁には赤いコードが何本も走っており、両端には柵が取り付けられていた。

そして早速、魔獣のお出ましである。ただ、ルインたちに気付いていないらしく、背を向けたまま。

深い青の体毛に頭部から無数に生えているのは、黄色の突起。一見すると大きな鼠のようだが、れっきとした魔獣だ。

数は三体。決して遅れを取る魔物ではない。普通に戦っても勝てるだろう。本来の力を出しきれないルインでも。

ルインたちは無言で頷き合い、同時に金属の床を蹴った。ルインは刀に手を添えたまま、一瞬で間合いを詰める。

この程度の魔獣、魔法<sup>アイツ</sup>を使うまでもない。

ルインの隣に並んだのはランディ。その後ろに、ロイドも続く。

《闘神の息子》と共に戦うなど、直ぐに割り切れるものではないが、やるしかない。

エリイの銃から放たれたエネルギーが魔獣の動きを止めると、レイオが振るった魔導杖から生まれた無数の紫光が薙ぎ払う。

魔法<sup>アイツ</sup>のように見えたが、光の出所は杖だろうし、アイツを発動するには駆動時間が必要だ。

否、今はそんなことはどうでもいい。息を吐き出し、刀を抜き放つと同時に魔獣を両断した。飛び散った血が床を赤く染める。

それから僅かに遅れて、ランディが振り下ろした戦斧が魔獣を穿つ。ロイドは自身の手足のようにトンファーを操り、無駄のない流麗な動きで突きを放つ。弾き飛ばされた魔獣は壁に叩きつけられ、断末魔の悲鳴を上げた。

ルインは刀に付いた血を払い、鞘に納める。

「よし……何とか倒せたか」

ロイドもトンファアを下げ、小さく息を吐く。何せ、特務支援課、初の実戦である。五人で戦うのなら、チームワークが肝心だ。今は大した魔獣ではなかったが、下手をすれば足を引っ張るかもしれない。

いくら個人の能力が優秀でも、戦い方次第では個々の力を活かすきれない。

「ま、そこまで手強い相手じゃなかったみたいだな」

「この程度で手こずるようなら、話にならない。そう言うことでしよう?」

ルインは笑うランディに冷やかに言い放つ。

どこか刺があるような言い方に、ルイン自身も内心舌打ちする。

彼の方は気にしていないようだが、問題を起こして気づかれでもしたら厄介だ。

知らぬ存ぜぬで通せるほど、《闘神の息子》も甘くはないだろう。

「でも、これでお互いのスタイルも何となく掴めたわね。ティオちゃんの魔導杖の性能にはちょっと驚かされたけど……」

エリイが話題を変えてくれたことで、ほっと胸を撫で下ろす。途端、一斉に皆の視線がティオに向けた。

エリイとティオの二人にはサポートに回って貰うのが賢明だろう。エリイの銃は牽制に持ってこいだろうし、射撃の腕も文句ない。

ティオの魔導杖はやはりただの杖ではなかった。杖から放たれた

のは眩い紫の光。魔法の光とよく似ている。

いや、そのものと言っていていいだろう。

「……確かに。あの杖から放たれたのはやっぱり魔法のたぐいなのか？」

「ええ、そうなりますね。通常のアーツと違って外す可能性はありますが……駆動時間なしに近距離のアーツを発動しているのと同じ効果です」

ロイドの言葉に頷いたティオは魔導杖について説明してくれる。通常のアーツはまず外れることはない。魔導杖も狙いは付けられるらしいが、オーブメントほど正確ではないとか。その辺りはまだ調整段階であり、そのためのテストだろう。

しかし駆動時間なしにアーツを行使出来るのは強みである。アーツは確かに強力だが、その間は集中しなければならぬため、どうしても無防備になってしまう。

まだテスト段階だとしても、戦闘でも随分なアドバンテージになるに違い。ランディはと言えば、興味深そうにティオの説明を聞いている。

「ふむ、そうなると色々と戦術に幅が出そうだな」

「アーツを駆動時間なしに操れるのは強みね。ただ駆動時間がないから、威力の方は“それなり”みたい」

見たところ、魔導杖には改良点も多いのだろう。ルインも少し見ただけで、あまり偉そうなことも言えないのだが。アーツを駆動時間なしで行使出来るという点では強力だが、やはりやや威力不足は否めない。

オーブメントから強力な力を引き出すには、当たり前だが時間が掛かる。その時間が駆動時間なのだ。アーツの威力は駆動時間に比例する。駆動時間が長ければ長いほど、強力なアーツだと考えて良いだろう。

「それは仕方ありません。まだテスト段階の新装備ですから。それと、わたしが付けているこの胸甲ですが、魔導杖と連動して一種の防御フィールドを展開する働きを持っています。見た目より打たれ強いので、前に出ても問題はないかと……」

ティオの視線は自身の胸元、正確には銀色の胸甲に向いている。彼女には少々不似合いだと思っていたが、特殊な効果があるなら納得だ。

魔導杖と連動して防御フィールドを展開出来るのなら、華奢な少女でも前に出ることは可能だろう。

「なるほど……まさに最先端の装備ね」

「ま、せいぜい頼りにさせてもらおうとしようかね」

エリイが感心したようにティオを見つめる。ランディも頼りにさせてもらおうとしようかね、と笑ってティオの肩を叩いた。

駆動時間なしにアーツを操れる魔導杖や、杖と連動して防御フィールドを展開出来る胸甲といい、最先端の装備である。流星はエプスタイン財団ということか。

しかし、ここに納得していない人物が一人。ほかでもないロイドだ。結構な付き合いであるロイドには、彼が何を考えているのか大體分かる。

ロイドはロイドの考えなど露知らず、何とも言えない複雑な表情を浮かべていた。

「うーん、でもなあ……女の子を矢面に立たせるのはちょっと……」  
彼としてはいくら防御フィールドに守られているとは言え、自分より年下の少女を前線に立たせたくないと考えているに決まっている。

テイオは華奢で、とても前線で戦えるようには見えない。実際、荒事に向いているとは言えないだろう。

そんなロイドの態度が気に入らなかつたのか、テイオは不機嫌な顔になり、彼を睨みつける。

「……いえ、何でもありません」

テイオの鋭い視線に咄嗟に目を逸らすロイド。何も言えなくなつた彼を見て、ルインとエリイは顔を見合わせて笑つたのだつた。

先ほどの魔獣と言ひ、ジオフロントに生息している魔獣はそれほど手強いものではないようだ。一般人からすれば十分な脅威だろうが、遊撃士フレイサーから見てもこの程度の魔獣など、肩慣らしにもならない。ジオフロントの構造自体複雑ではないので、迷うことはなかつた。道なりに進んでいく。

途中、何度か魔獣と出くわしたが、ルインたちの敵ではない。

先頭をロイドとルインが歩き、その後ろにエリイとテイオ、殿をランデイが務める。万が一、不意打ちされても問題ないようにだ。

ルインはふと、隣を歩くロイドを一瞥した。詳しくは知らないが、彼の亡くなった兄も捜査官だったという。ルインにはロイドは眩しかった。太陽のようだと言えはいいのだろうか。時々羨ましくなる。

ルインは単独で戦うことには慣れているが、集団で戦うのは苦手だ。それは候補時代のことに関係しているのだが、皆の動きに合わ



せることが出来ない。警察学校に在学していた時も皆、足手まといにしかならなかった。無理に動きを合わせようとすれば調子が狂ってしまう。

そんなルインを助けてくれたのがロイドだった。親友、と呼べるほど親しくはないが、それでも必要以上に付き合いをしなかった自分にとっては友人と呼べる少年。

「ルイン、どうかした？」

「気にしないで。ただ、まさかロイドと同じ課に配属されるとは思わなかったから」

見ていたことに気づかれたのだろう。不思議そうにこちらを見返してくる。

ルインは気にしないで、と首を振ると、困ったように笑う。

まさかクロスベル警察、それも同じ課に配属されるとは思わなかった。何せ、ロイドもルインも捜査官の資格を取ったばかりの『新人』だ。

「お二人は警察学校時代の友人だったんですか？」

「まあ、そんな所かな。実技の方はいつもルインには敵わなかったけど」

「ハハ、心強くていいんじゃないか？」

尋ねるティオに、ロイドは苦笑している。ランディは茶化すように笑っているし、エリイはと言えば純粹に感嘆の視線を向けて来た。顔には出さないが、『闘神の息子』に言われるのは釈然としない。

ロイドが言ったことは事実だ。しかし、

「それは個人戦の話。それに捜査官なんだから、個人より集団の方が大事でしょう？ 判断能力だってロイドの方が優れているもの」

ロイドが言うように、彼は一度もルインに勝てたことがない。個人戦では。

それはそうだろう。結社で執行者候補として訓練を受け、『仕事』もこなしてきた。今は全力で戦えないとは言え、彼は普通の人間だ。『普通』の人間ではない自分と違って。

捜査官に求められるのは個人の強さではない。犯人を制圧する時だって、重要になるのは仲間同士の連携である。一人だけ特出していると、逆に調和を乱してしまう。

それだけではなく、リーダーとしての判断力もロイドの方が優れているだろう。

「……ルインは俺を褒め過ぎだよ」

「わたしは事実を言ったまでだけど」

「ふふ、それだけロイドが優秀ということじゃないかしら？」

二人のやり取りを見ていたエリイが堪えきれずに笑みを漏らした。褒め過ぎだとロイドは言うが、ルインはそうは思わない。彼は自分を過小評価しすぎているだ。どうしても捜査官であった兄と比べてしまうからだろうか。

それに、ロイドには人を惹きつける才がある。ルインが初めて彼を見た時、太陽だと思ったように。

## 泣き声の主

放たれた鋭い氷の刃が、不定形の魔獣を切り裂いた。その魔獣の体には、奥に核のようなものがあり、それを覆っているのが水色のブヨブヨとしたものである。こんな魔獣には打撃が効きづらいため、アーツによる攻撃が有効だ。

この時ばかりはロイドやランディは守りと牽制に徹してもらい、テリオと比較的アーツが得意なルインとエリイがアーツを使う、という形に落ち着いていた。

奥に進むにつれて魔獣の数は増していく。時には力づくで叩き潰し、或いは切り捨てて先に進んだ。この中で体力的に不安なのはテリオだろう。いくら魔獣が大したことはないと言っても、疲れない訳ではない。

そして見た所、彼女は戦い慣れていない。ある程度の経験は積んでいるだろうが、持久力、という点ではこのメンバーの中では一番下だろう。

ルインは刀を軽く振って鞘に納めると、背後にいるテリオに視線を向けた。

「テリオ、辛くはない？」

「……問題ありません」

「そう、ならいいけれど」

やや間はあったものの、テリオからしつかりした答えが返って来た。ルインはロイドと違って細かい心遣いが出来ない。それを自覚しているため、意図して声を掛けるようにしている。

テリオもルインの気遣いに気づいたのだろう。ほんの少しだけ表

情が和らぐ。笑みというにはまだ随分ぎこちなくはあったが、初めて見る笑顔だった。

ルインはテイオから、今度は前を歩いている二人に視線を向ける。視界に入ったのは、ロイドと彼と会話しながら歩を進めるランディ。

これはルインも同じなのだが、今の彼は到底本気を出していない。自分たちがいるのだから当然かもしれないが、武器だってスタンハルバードのまま。

相変わらず飄々としているし、ロイドたちと話す様子を見ているも、気の良い兄ちゃん、と言ったところだろうか。今のランディにはかつて相對した時のような、『闘神の息子』の片鱗すら感じられなかった。

「ルインさん、何か問題でも？」

テイオの声に我に返り、返事をしようとしたルインの耳に泣き声が届いた。声からして一人だろうが、これは一体どういうことだろう。

聞こえるはずのない声にロイドたちも驚きを隠せない。

「この声は……!？」

「こ、子供の泣き声……!??」

「おいおい、どういう事だよ？ 確かジオフロントの内部は封鎖されてるんじゃないのか？」

ロイドやエリィは焦ったように周囲を見回し、声の主を探している。

ランディはおいおい、と若干辟易しているようだ。彼が言うよう

に、普段ジオフロントの内部は封鎖されている。凶暴な魔獣が出るため、業者や一部の者しか入れないようになっていた。だからこそ、ルインたちも入る前にセルゲイから鍵を渡されたのだ。

「……わたしに言われても。あくまで公式的にそうなっているだけの話です」

「まさか広場のマンホールから？」

話を振られたティオは呆れたような顔をしている。それもそうだろう。何故、封鎖されているジオフロントに子供がいるのか、彼女が知るはずがない。

もしかして、とルインは思う。記憶に間違いがなければ、中央広場にはジオフロントに繋がるマンホールがあった。業者が使ったものだが、子供が偶然見つけて入ってしまったのだろうか。

「話は後だ！ とにかく一刻も早く泣き声の主を探してみよう！」

「ええ……！」

まずは泣き声の主人を探すことが先決だろう。ロイドとエリイに続き、ルインたちも歩き出す。どうやら声は通気孔のような場所から聞こえているらしい。頷き合い、足を踏み入れる。

先に進むにつれ、泣き声が段々大きくなっており、やはりこの中に泣き声の主人がいるのは間違いないだろう。僅かな光が漏れているものの、中は全体的に薄暗い。

「……どうしよう……このままじゃ……ヒック……」

「おーい、誰かいるのか！」

ロイドが叫ぶと、怯えたような声が返ってきた。薄暗い通気孔の中に見えた少年の姿。緑のズボンを履き、臙脂色の上着を身につけている。淡い色の髪はやや埃に汚れており、相当怖かったのか顔がひきつっているではないか。

安堵の息をついたロイドに対し、男の子の顔が歪む。しまったと思っただけにはもう遅い。

「よかった。こんな所にいたのか。大丈夫かい？ どこかケガしてないか？」

「うううううう……ふええええええっ……！！」

怪我はないようだが、気が緩んだのか泣き出してしまったのだ。泣きじゃくる男の子にロイドはどうしていいか分からず、おろおろしている。そしてそれはルインたちも同様だった。ランディも珍しく困っているようだし、テイオも微妙に表情が変わっている。ルインも子供の相手は得意ではない。

そんな仲間たちの中で、一歩前に出たのはエリイだった。

「安心したとたん、気が緩んじゃったのね。ロイド、私が代わるわ」

「あ、ああ……」

「……よしよし、恐かったね。もう大丈夫だから……お姉さんたちが付いてるからね」

ルインたちの中で唯一動揺していなかったのがエリイで、彼女は男の子に近づき、頭を撫でる。慣れているのだろうか。頭を撫でら

れた男の子は安心したのか、いつの間にか涙が止まっていた。

こんな場所で一人取り残されれば不安にもなる。男の子は鼻をすすり、流れ出た涙を袖で拭った。エリイは優しく笑い、男の子が落ち着くまで待っている。

「うづうづう……ヒック……う、うんっ……！」

「外にいた怖い魔獣はお姉さんたちが退治したわ。ここは暗くて狭いからいったん外に出ましよう。さ、抱っこしてあげるからしっかり掴まっけていてね」

「だ、だいじょうぶです……ボク……もう立ってますから！」

この辺りの魔獣はあらかじめ掃討したため、危険はないだろう。

さ、とエリイが男の子の手を取ると、彼は顔を赤くして俯いた。よほど恥ずかしかったのだろうか。顔を上げた男の子は林檎のように真っ赤だ。

「そっか……ふふっ、男の子だもんね。名前はなんていうのかしら？」

「えとえと……アンリっでいいですよ！」

エリイが名を尋ねると、男の子は元気よくアンリ、と名乗った。

彼女の鮮やかな手際にはルインも感心するばかりである。ロイドや自分では、エリイのようにはいかなかっただろう。ルインも子供の扱いだけは慣れていない。

ロイドはうーん……と苦笑しており、ランディも鮮やかなもんだねえ、と目を細めて笑っていた。

アンリを連れて一行は薄暗い通気孔から出て、改めて彼に尋ねる。

「それで、アンリ君。どうしてこんな場所に？ 鍵がかかったはずだけどどこから入ってきたの？」

これこそ一番の疑問である。ジオフロントの入り口は確かに鍵が掛けられていた。あの扉から入ることはほぼ不可能。他の扉も同じだろう。誰かが鍵を掛け忘れたのなら別だが。

もし鍵を掛け忘れた場所があったなら信用に関わる。死活問題ではないか。

「えと、その……ボクたち中央広場の鐘のある場所で遊んで……そこにあつた蓋を開いたらハシゴがあるのを見つけて……そ、それで……」

「なるほど、あのマンホールから入って来ちまったわけか」

「やはり、ね。でも待って……」

一様に真剣な顔になったルインたちに驚きながらも、アンリは詳細を話してくれた。ルインが予想した通り、彼は中央広場のマンホールから入ってきたのだと言う。

テイオは頭に手を当て、あの入り口はデータベースに追記する必要があるそうですね、と疲れたような表情をしている。

しかしここで一つ聞き流せない単語があつた。ロイドもそれに気づいたのか、血相を変えてアンリに詰め寄る。

「ちょ、ちよつと待った！ 『ボクたち』ってことは……他の子も一緒に入ったのか！？」

「は、はい……友達のリュウと一緒に冒険してみようって……で、



でも途中で恐い魔獣に見つかって逃げてるうちにはぐれちゃって……うつつ……」

ロイドの指摘にルインを除いた皆があ、と驚きの声を上げる。

アンリは一人ではなく、友人と一緒に入ったまでは良かったものの、魔獣に見つかり逃げている内にはぐれてしまったのだと話してくれた。

怪我ひとつなく逃げ切れたのは僥倖だろう。大怪我をしてもおかしくない。下手をすれば命を落としていたかもしれないのだ。

エリイが窺うようにロイドを見る。

「そうだったの……。　　ねえロイド、どうする?」

「そうだな……時間が無い。この子と一緒に奥まで行こう。ルインもそれでいいか?」

「ええ。わたしもそれが最善だと思う。この子が友だちとはぐれてどれくらい時間が経っているのか分からないけど、一刻も早く見つける必要がある」

意見を求められたルインも概ねロイドと同じ考えだ。アンリが友人とはぐれてどれくらい時間が経過しているか分からないが、事態は一刻を争う。

一旦戻る時間はないし、アンリが無事だったからと言ってリュウが安全だという保証もどこにもない。

それに、子供の足では逃げてもすぐに追いつかれてしまう。

「……いいんですか?　その子を先に脱出させなくて」

「いったん二手に分かれて搜索を続けるって手もあるぜ?」

「とにかく一刻を争う。いきなり戦力分散するのも得策じゃないだろう。……エリィ、この子の守りを頼んでいいか？」

ティオの意見ももつともである。ランディの案通り、二手に分かれることも可能だ。

アンリを連れていけば、彼を庇いながら戦わなければならないだろう。危険な目に合わせてしまうかもしれない。

しかし一旦戻る時間はとれないし、この状況で二手に分かれるのは得策とは言えない。ならば多少の危険を覚悟して、アンリを連れて行く方がいい。

「ええ、任せておいて。もし魔獣と戦闘になっても私がこの子に近づけないわ」

「アンリ。これからお兄さんたちは君の友だちを捜しに行く。ここにいたら君も危ないからできれば付いてきて欲しいんだ。……どうだい？」

ロイドはエリィの言葉に頷くと、しゃがみ込み、視線をアンリと同じ高さに合わせた。目を見て、何も心配ないと言うように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

アンリもロイドが言おうとしていることを理解したのだろう。未だ表情は硬いが、しっかりと首を縦に振ってくれる。

「う、うん……。ボク、リュウのことが心配だし、いっしょに行きます……！」

「よし、いい子だ。護衛対象を守りながらの搜索だ。今まで以上に慎重に進んでいくことにしよう」

ルイン達はアンリを守りながら先に進む。ロイドが言うように、これまで以上に慎重にならなければならない。毛程も傷つける訳にはいかないのだ。

ルインにとってはただ戦うことよりも難しい。誰かを守る、というのは今もまだ慣れなかった。ルインはいつも斬るばかりで、奪う方だったから。

## “守る”戦い

並んで歩くエリイとアンリを見てみると、昔を思い出す。ルインがまだ執行者候補だった頃。

ただ、戻らない過去に思いを馳せながらも警戒は怠らない。

自分を暗闇から救い出してくれたのは、銀色の髪をした青年と黒髪の少年だった。青年はルインを妹のように可愛がってくれ、様々なことを教えてくれた。

少年はどこかルインに似ていたのかもしれない。

否、ルインよりずっと深い闇を抱えていたのだろう。彼の琥珀色の瞳は虚ろで、何も映していなかった。確かに目の前を見ているというのに、『何も』見えていなかったのだ。

それでもルインは、彼が嫌いではなかった。彼と過ごす時間は苦痛ではなかったし、時には手合わせもした。

養父に拾われてから、意識的に考えないようにしていたこと。彼らは今、何をしているのだろう、と。今も執行者レギオンなのだろうか。

銀色の青年、黒髪の少年、そして董色の髪をした少女。彼女を本当の『天才』と言うに違いない。彼女と共にいたのは僅かな時間だったが、それでも彼女の力の片鱗を垣間見ることが出来た。

彼女が持つ力が『それ』なのだろうか。ルインがこの力を持っているように。

痛みと共に封じた記憶。

いや、意識的に思い出さないようにしていただけ。過去からは逃れられない。ちゃんと向き合わなければと思うのに、弱い自分はそれだけで怖くなる。犯してしまった罪の重さに押しつぶされれば、どんなに楽だろう。それは安易な逃げだ。

けれど、許されないと知りつつも考えてしまう。

周囲に魔獣の気配はない。先ほど、アンリを守りながら戦ったが、やはり守るべき人物がいると戦闘も違ってくる。警察学校時代も何度も模擬戦をしたが、それでもやはり練習と実戦は違う。緊張感もだ。

この辺りの魔獣はそれほど強くはないため、心配はないだろうが、油断は致命的なミスを招く。

そんな時、殿をつとめていたランディがなあ、と声を掛けてきた。歩く速度を弱め、彼の隣に並ぶ。

「前に会ったことないよな？」

「……… 新手のナンパ？」

内心の動揺はおくびにも出さず、つとめて平静に答える。少しだけ眉を潜めて不愉快そうに。

覚えているはずがない。現にルインだって忘れていたのだ。こちらには彼の名を知っていても、向こうは知らない。知るはずがない。

確か自己紹介で趣味はナンパだと言っていたはず。

ルインが冷ややかな視線を向けると、ランディはばつが悪そうな、それでいて呆れたような表情を浮かべた。

「ナンパってあんなあ……。俺をなんだと思ってるんだか」

「違った？ それはごめんなさい。わたしの魅力が足りないようで。それともランディは、年上好みなのかしら、ね」

くすくすと笑う自分は、余裕があるように見えているのだろうか。ここで動揺する素振りなど見せられない。これから先、表向きだけでも同僚として働くためには、感づかれてなるものか。

例え今の彼が《赤い星座》と無関係だとしても、進んで過去を教えようとは思わない。厄介事を自ら増やしてどうする。

そもそも自己紹介で趣味はナンパと言っておいて、何だと思ってる、はないだろう。

ランデイが反論しようとしたその時、

「く、くるなよ〜！ うわあん、助けてええっ！ 女神さま〜っ！」  
エイドス

アンリとはまた違う、少年の声が聞こえた。頷き合い、鉄の階段を上ると、魔獣に囲まれた男の子の姿が視界に入る。先ほどルインたちが相手にしたような、ぶよぶよした不定形の魔獣が少年を取り囲んでいる。

青い髪にニット帽を被った彼が、アンリと一緒にジオフロントに侵入したリュウなのだろう。彼の姿を目にしたアンリが悲鳴に近い声を上げた。

「リュウっ〜！」

あの魔獣自体はそれほど強くはない。ただ、こちらには守るべきアンリともう一人の少年もいるのだ。彼らを守ることが最優先。

このまま背後から強襲し敵を殲滅するか、それとも魔獣の注意をこちらに向けるのか。考えている暇などない。このままでは男の子が襲われてしまう。

「このまま突っ込むぞ！ 魔獣の不意を突きつつ子供の安全確保を最優先で！」

一瞬で判断を下したロイドに、ランデイはよし来た、とスタンハルバードを構え、エリィがホルスターから銃を抜く。

ルインも即座に刀に手を掛け、ティオも魔導杖を握り締めた。

まずは魔獣の不意を突いて、少年の安全確保をした後、一気に殲滅する。こちらに注意を向けるのもいいが、それではアンリも危険に晒されるだろう。

エリイとティオはアンリを守りつつ、魔法の詠唱に入る。瞬間、二人の体が燐光に包まれた。戦術オーブメントから力を引き出しているのだ。

駆け出したランディが魔獣に向けてスタンハルバードを振り上げる。

「はああ！ 喰らいな！」

それは正に力任せの一撃。<sup>パワースマッシュ</sup>容赦なく振り下ろされたハルバードは魔獣の核を砕き、直撃から逃れた他の魔獣を吹き飛ばした。

凄まじい衝撃だ。離れた場所にいるルインにまで衝撃が伝わって来る。

少年の行く手を塞いでいた魔獣が倒れ、ロイドが保護に向かう。すると、少し離れていた魔獣が少年に向けて何かを飛ばした。体液だろうか。ロイドは咄嗟にリュウを庇い、トンファーで防御するとトンファーが瞬く間に凍りついていくではないか。

「リュウ！ こっちだ！」

「ロイド、その子をお願い。後はわたしたちで片付ける」

ルインはすれ違いざまにロイドに声を掛け、即座に魔獣との距離を詰める。そして腰の刀を抜き放つ。

紫電一閃。ルインが抜き放った刃は、寸分の狂いなく魔獣の核を捉えていた。核を両断された魔獣の体が弾け飛ぶ。その間にティオとエリイの詠唱が終わり、魔法が発動する。

ティオの眼前から生まれた火球が魔獣を焼き尽くしたかと思うと、

エリイの命に従い、<sup>スパーケル</sup>稲妻が魔獣を撃ち貫いた。  
既に動いている魔獣はいない。戦いは終わりを告げたのだ。魔獣の気配がないことを確認し、トンファーを下ろしたロイドはふう、と息を吐く。

エリイもやや疲れたように、何とか片付いたわね、と笑みを零していた。肉体的に、と言うよりは精神的にだろ。自分たちだけだ戦うならまだしも、先程は守るべき対象が二人もいたのだ。

二人には傷一つ付けられない。ここで彼らを守れなければ、ルインは警察官になった意味がないのだから。

「さすがにちよいと手こずっちまったかな」

「……疲れました」

ルインが無言で刀を鞘に納めると、ランディも流石に疲れた様子だ。テイオも既に魔導杖を下ろしている。助けられた少年　リュウはいまいち状況を飲み込めていないらしい。そんなリュウにアンリが血相を変えて近寄った。

「リュウ、大丈夫！？　ケガとかしてない！？」

「う、うん……　ぜんぜんへーキだぜ。それよりオマエも無事でホントーによかったぜ！　オマエ、どんくさいからな。オレが助けてやしないと魔獣にくわれちまうと思ってさあ」

先程の怯えようはどこに行ったのか、そう思わせるほど態度が違う。アンリに弱みを見せたくないのかもしれない。

うって変わって元気になったリュウを見て、アンリは慌てている。ルインたちが黙っていると、二人は言い争いを始めた。自分だっ



て魔獣に食べられそうになったくせに、とアンリが言うと、リュウは、先にジオフロントの話が始めたのはアンリだと言う。

このまま放って置けば、いつまでも話が終わらない。ロイドが二人の間に入るうとするが、

「はいはい。言い争いはそこまでだ」

「う、ごめんなさい……」

「へ、兄ちゃんたち、初めて見る力才だね。けっこう強いみたいだけど新人のヒトたち？」

素直に謝るアンリに対し、リュウは悪びれる様子など一切ない。むしろ品定めをするかのような視線でルインたちを見回している。

まさか助けた後に、そんな事を言われるとは思っていなかったのだろう。ロイドは、へ、と気が抜けた声を出して目の前の少年を見つめていた。

「ったく……調子のいいガキンチョだな。助けられたんだったらまずはお礼を言うのが先だろ？」

「さつき女神エイトスに助けを求めてたとは思えない変わりようだけど。あの意味では感嘆に値するわね。その凶々しさは」

「へへっ、まあ助かったよ。危ない所もあったけどオレもカスリ傷ひとつなかったし。わりと手際がいいんじゃない？」

呆れたようなランディとルインの言葉を聞いても、リュウは余裕を崩さない。面の皮が厚いというか、調子が良いというか。何にせよ、呆れを通り越して感嘆すら覚える。

感謝をしていない訳ではないようだが、どこまでも上から目線の少年らしい。

流石のロイドも対応に困るらしく、そりゃどうも、と答えながらも、ホント調子いいなあ、と零していた。

“守る”戦い（後書き）

む、難しい！やはり私は戦闘描写が苦手なようです……。

## 一人じゃない

「ふふ、でも無事でよかった。とにかく一度、外に出るとしましよ  
うか」

「……そうですね。どうやら終点みたいですし。一応、セルゲイ課  
長の課題もクリアしたことになりますね」

何はともあれ、無事に済んだことは確かだ。エリイはリュウを見  
て笑みを零しているし、アンリはどうしていいか分からず、おろお  
ろしている。

テイオの視線の先には大きな鉄の扉。ここがジオフロントの最奥  
だろう。セルゲイが一行に出した課題は、魔獣を掃討しながら奥ま  
で向かうこと。ハプニングはあったが、上々だろう。

「ま、こんなハプニングがあるとは思ってもなかったけどな。そん  
じゃガキどもを送ったら警察本部に戻るとするか」

引き返そうとするロイドたちだが、そこで子供たちの様子がおか  
しいことに気づく。二人とも、怪訝そうな顔をしているのだ。まる  
で大変な何かに気づいたように。

ロイドがどうしたんだ、と尋ねると、リュウがおずおずと口を開  
いた。兄ちゃんたちってやっぱり新人なんだよな、と。

そんな彼に、ロイドは首を傾げながらも頷く。何故、彼はロイド  
たちが新人であると気づいたのだろう。制服を着てはいないとい  
うのに。

するとリュウは更に混乱しているようで、アンリと顔を見合わせ  
ている。

そこでルインはあることに気づく。彼らもこちらも『勘違い』を

していたのだ。

「わたしたちは貴方たちが思う新人ではないわよ。ギルドの新人ではなくて、警察の、ね」

「ケーサツの人間っ!? うっそだあ! ギルドの新人じゃないのかよ! どうしてケーサツのお巡りがこんなところにいるんだよ!」

余程衝撃的だったのだろう。アンリは口を大きく開いているし、リュウに至っては半ば叫び声に近い。思った通り、彼らはルインたちを遊撃士と勘違いしていたのだろう。

どうして最初から気付かなかったのか。ロイドは警察の人間であることを前提に話をしていたため、遊撃士と勘違いしていた彼らと話が噛み合わなかったのだ。

おまけに皆、制服を着ていないし、支給された警察手帳も見せてはいなかった。

ロイドは驚きながらも、ジオフロントにいた理由を語る。

「あ、ああ……ちょっと事情があつてさ。任務の途中で君たちを見つけたって訳なんだけど。……でも、そんなに不思議なことか?」

「だつてさあ! ケーサツのお巡りっていったら腰抜けつて有名じゃないか! 態度もオーヘイなわりに何の手助けもしてくれないって父ちゃんが言ってたぞ。いざという時は、遊撃士の方が何十倍も頼りになるって」

「議員の圧力を受けて満足に動けない警察と違って、ね。何も出来ない警察より、遊撃士の方がよほど信頼出来る。それが市民の本音でしょう」

リュウの口から出たのは辛辣な、だが、否定しようのない事実だった。ロイドは呆気にとられて何も言えず、エリィはやっぱり、と小さく呟いた。市民の本音を聞いたルインは笑う。

クロスベル警察は、軍隊の保持を許されていない自治州の治安維持を目的とした組織。

しかし、現状は違う。エレボニア帝国とカルバード共和国に挟まれたクロスベルは、様々な犯罪の温床になっているのだ。にも関わらず、二大強国の議員の圧力を受け、警察はまともに機能していない状態である。市民からの信頼を失うのも当然と言えよう。

対して遊撃士は、（民間人が危険に晒された場合を除き）国家権力に干渉することは出来ないが、民間人の安全と地域の平和を目的としている。警察のように二大強国の圧力を受けることもない。

よってこのクロスベルでは、遊撃士は市民に絶大な人気を誇っているのである。特に《風の剣聖》の二つ名で呼ばれる彼の存在が大きいのだろう。

「リ、リュウ、失礼だよ。いくら警察のヒトだってボクたちを助けてくれたんだし」

「そ、そうだけどさ。せっかくギルドの新人に助けてもらったと思っただのに……」

アンリが慌ててリュウの袖を引っ張るが、複雑な表情をしている。助けて貰ったことには感謝しているようだが、遊撃士ではなくて期待はずれ、と言うのが本音に違いない。

刹那、感じた気配にルインは腰の刀に手をかける。ルインだけではない。ランディも気づいたのだろう。おい、マズイぞ、と険しい表情で唇を噛む。

頭上から落ちてきたのは、先ほど相手をした魔獣を更に大きくし

たものだ。触手のようなものが二本頭から生えており、核を包むように半透明の物体が体を覆っていた。

その大きさは掃討した魔獣とは比べ物にならない。あまりの恐怖にアンリとリュウは彫像のように固まっている。

皆、突然現れた魔獣に狼狽していた。圧倒されていると言ってもいいだろう。

比較的冷静なのはティオだったが、魔導杖を持つ彼女の手は震えていた。

「……まずいです。背後の扉はロックされています」

「くっ……このままじゃ……！」

逃げ場はない。唯一の出入り口は魔獣が塞いでいる。アンリとリュウを守りながらここを脱出するのは正直、厳しかった。今の自分達の装備では満足に戦うことが出来ない。特にエニグマのスロットにセットされているクオーツは一つ。それも下位のものである。

大規模なアーツは使えないし、身体能力の向上という恩恵も僅かしか期待できない。

今出来る『最善』のことをするために、ロイドはトンファーを構え、魔獣を睨みつけた。

「おい、どうするつもりだ!？」

「ここは俺が引き付けるからみんなは」

ロイドも理解している。どれほど無謀なことなのか。簡単に我が身を投げ出す訳ではないが、ここで全滅する訳にはいかない。

しかしアンリとリュウの二人を守りぬき、魔獣に勝利するという結末がどうしても思い描けなかった。ならば少しでも可能性のある

方に賭ける。

みんなは何とか脱出してくれ、そう言おうとしたロイドを遮るもの。

「待つて、ロイド。貴方を一人で戦わせる訳にはいかない。貴方はリーダー。自分一人で戦うより、もっと良い方法がある。それに大丈夫。 “もう少し” だから」

ルインは刀に手を掛けたまま、ロイドの隣に並ぶ。今のルインではあの魔獣を倒すことは出来ない。それでも彼を絶望的な戦いに向かわせるものか。確かに魔獣を倒すことは困難だろう。

だが倒す必要がどこにある。ロイド一人に任せるより、戦いながら何とかして抜け出す方法を探ることも出来るはず。それにルインには“視えて”いた。“彼”の姿が。

決して望んだ力ではないが、何かを守るために使えるのなら、これ以上のことはない。

ロイドは何と返して良いか分からなかったのか、トンファーを構えたまま、ただルインを見返している。

「ルイン……」

「ルインさんの言う通りです……！ ロイドさん、指示をお願いします」

「何とか隙を作りましょう！」

「まあ、そう言うことだ。ガキンチョどもは下がってな」

魔導杖を握りしめたテイオが、恐怖を振り払うように声を上げると、エリイもエニグマを手に、彼女の隣に並んだ。ハルバードを構



えたランディはアンリとリュウを庇うように前に出る。

張り詰める緊張の糸。一触即発。そんな空気が流れた瞬間、頭上から声が降ってきた。

「その意気込みは買うが、己の実力を弁えた方がいい。それではただの蛮勇だ」

「風の剣聖……」

声の主は仲間たちの誰でもない。落ち着いた男性の声だった。

ルインが見上げた先に佇んでいるのは一人の男。恐らくは三十代前後だろう。

長い紺の髪に切れ長の瞳。端正な顔立ちをしているが、左頬には大きな傷跡があった。茶のコートを纏い、抜き身の刀を携えている。

ルインは思わず、彼の二つ名を口にした。風の剣聖、と。

男は床を蹴って跳躍する。落下しながら刀を一振りした瞬間、閃く銀。僅か瞬きの間に魔獣は四散していた。

## 風の剣聖

鮮やかな手並みを披露した男を、呆然と見つめることしか出来ない。ランディやエリイ、テイオまでも目を丸くしている。

テイオは思わず、見えませんでした、と口走っているが、並の者なら確かに彼の動きを目で追うことは出来ないだろう。テイオは優秀だが、戦士として強い訳ではないのだから。

一瞬、時が止まったように誰も動かない。否、動けない。ルインはじつと男を見据えている。数度しか言葉を交わしたことはないが、ルインも彼と同じ《八葉一刀流》の使い手だ。

静寂を破ったのはアンリとリュウだった。男に駆け寄った二人は、一気にまくし立てる。

「す、すっげーっ！ すげーっ！ すごすぎるよ、アリオスさんっ！ うっわっ！ いいもん見ちゃったなああ！」

「あ、ありがとう、アリオスさん！ でも、どうしてここに……？」

「ああ、広場のマンホールに子供が入っていくのを見たという報告があつてな。しかし無茶をする。もしものことがあつたらどうするつもりだ？」

親しげに話していることから、どうやら顔見知りらしい。二人とも興奮しているのか、頬が僅かに赤く染まっていた。それもそうだろう。あの魔獣を一刀のもとに沈めてみせたのだから。

男 アリオスの話によると、二人がマンホールに入るのを市民が目撃していたらしい。その人物が遊撃士協会に報せたのだろう。

アンリはごめんなさい、と俯き、リュウも先程とは違って変わって素直に謝っていた。

「フ……まあ、無事ならそれでいい。もう夕方だ。とっとと出て家に帰るぞ」

ルインたちがジオフロントに入ったのは昼前である。夕方ならば子供はもう帰る時間だろう。アンリとリュウは、元気よく頷いてアリオスの隣に並ぶ。

ふと、こちらに視線を向けた彼がルインとルインが携えた刀を見て止まる。ルインの目から見ても、アリオスは少しだけ驚いているように見えた。黒塗りの鞘に納まったそれは、養父が生前愛用していたもの。

ルインが最後にアリオスを見たのは三年以上前だが、気づかないはずがない。暫しの沈黙の後、彼はゆっくりと言葉を吐き出した。

「その刀は……。まさか、グレン殿の……」

「お久しぶりです、アリオスさん。グレン・アスールの娘、ルインです」

「そうか……。捜査官になったか」

「はい。遊撃士では守れないものもありますから」

一礼し、淀みなく答えるルインに、アリオスは目を閉じて感慨深気に呟く。その表情は複雑であり、どこか納得したようでもある。

ルインの父、グレンは名の知れた遊撃士だった。アリオスとルインが顔を合わせたことがあったのも、父の関係だ。

クロスベル支部所属というだけでなく、父と彼が同じ《八葉一刀流》の使い手であったことも理由の一つ。

しかしその養父も数年前に亡くなり、ルインは養父と同じ遊撃士

の道ではなく、捜査官の道を選んだ。もし養父が生きていたのなら、ルインも遊撃士になっていたかもしれない。

けれど、父はもういないのだ。

アリオスはルインの言葉を噛み締めるように俯いた後、顔を上げた。その時は既に遊撃士の顔に戻っており、先程から微動だにしないロイドたちを一瞥する。

「どうした？ お前たちは戻らないのか？」

「え、ああ……そうですね。一緒に戻らせてもらいます」

ロイドはそこで初めて我に返り、慌てて返事をした。突然のこと  
でルインたちの会話に耳を傾けることしか出来なかったのだ。

いきなり現れた人物が自分たちの危機を救った上に、ルインの知り合いだという。驚かない方がおかしいだろう。そして彼が姿を見せた時、ルインが呟いていたのも知っている。その名はロイドも何  
度も目にしたことがあった。

「先程のようなこともある。最後まで気を抜かないことだ」

アリオスはもう一度だけルインを見ると、子供たちを連れて歩き  
出す。残された形になった一行は、大きな息を吐き出した。

彼が去っただけで、張り詰めた空気が霧散する。アリオスを前に  
すると、無意識に背筋が伸びてしまう。リュウが素直に謝った理由  
も分かるというもの。

「かあ〜っ！ なんていうオッサンだよ？ まとってるオーラが尋  
常じゃないというか……。ルイン、知り合いか？」

「数度言葉を交わしたことがあるだけ。知り合い、とは少し違うわ。

知り合いだったのは養父の方だから」

ランディが聞くと、他三人の視線が一斉にルインに向いた。確かに彼が纏うオーラは尋常ではない。執行者であっても、彼と正面きつて互角に戦える者など殆どいないだろう。

知り合いか、と問われれば、知り合いとは少し違う。

それまで沈黙を守っていたエリイが、やや驚きの混ざった声で口を開いた。

「……《紫電》グレン・アスール。数年前に亡くなったようだけど、まさかルインのお父様だったなんて……」

「ええ。別に隠すつもりはなかったけど、知ってどうする訳でもないでしょう?」

「なんだ? 有名なのか?」

別に隠すつもりはなかった。あえて言うのなら、聞かれなかったから。わざわざ報告すべきことでもないだろう。

ランディとテイオが知らないのも当然だ。養父は数年前にこの世を去ったし、二人共、クロスベル出身ではないのだから。

驚いていたのはエリイだけではない。ロイドもである。

「数少ないA級遊撃士の一人で、居合の達人だ。俺も初めて聞いたけど」

「ロイドさんも知らなかったんですか? お二人は同級生だったんですよね?」

「そうだけど、ルインは殆ど自分について話さなかったから」

尋ねるティオに、ロイドは困ったように笑っていた。

ロイドとルインは確かに同級生だったが、親しい友人ではない。ルインも自分について殆ど話さなかったこともあり、父が遊撃士であることしか話していなかった。

《紫電》グレン・アスール。数少ないA級遊撃士の一人であり、居合の達人でもある。ルインは彼から刀の扱いを学んだ。

「そう言えば、話してなかったかもしれない。ごめんなさい」

「ルインの場合、確信犯だよな。いや、笑いながら謝られても……」

小さく笑いながら謝るルインに、ロイドは脱力した。

普段は冷静で、近寄りがたい雰囲気を漂わせていることもあるのに、飄々とした所もあり、ロイドも未だ『ルイン』という人物を掴みかねている。

話していなかったかもしれない、と彼女は言うが、絶対に確信犯だろう。

「それはそうとして、何者なんだよ、あの凄まじいオッサンは」

「アリオス・マクレイン。クロスベルタイムズで何度か読んだことがある。遊撃士協会・クロスベル支部に所属する最強のA級遊撃士。どんな依頼も完璧にこなし、市民から絶大な信頼を得ているクロスベルの真の守護神……。《風の剣聖》アリオス・マクレインだ」

ロイドもここ三年ほど、クロスベルを離れていたが、クロスベルタイムズだけはかかさず読んでいる。そのクロスベルタイムズでアリオスは何度も取り上げられていた。

アリオス・マクレイン。《風の剣聖》の二つ名で呼ばれる彼こそ、クロスベルで遊撃士が絶大な信頼を得ている一因と言えよう。どんな依頼でも完璧にこなす遊撃士。

遊撃士にも功績や能力によって表されるランクがあり、A〜Gの七段階が存在する。今は亡きルインの父やアリオスは、ゼムリア大陸全土に二十数名しか存在しないA級遊撃士なのである。

話し込んでいたお陰で、既にアリオスたちの姿も見えない。彼らを追いつ、もと来た道を戻る途中でさえ、誰も口を開かなかった。

疲れているのも理由だが、今日一日で様々なことが起こりすぎて喋る気力も無かったのだ。

歩きながらルインはふと考える。

魔獣と対峙した時、危険だとは思わなかった。アリオスの気配を感じる前から、確信していたのだ。『視えた』訳ではない。何の因子もなしに、ただ未来を視るなど不可能だ。ルインの能力ではない。では何なのか。いくら考えても答えは出そうになかった。

ルインが思考の海に浸っている間に、出入り口まで戻ってきていたらしい。鉄の扉を潜ると、橙色に染まった光が目飛び込んでくる。アリオスが言っていたように、もう夕刻なのだ。

再び歩き出そうとした瞬間、オーバルカメラを手にした女性と、アリオス、そして子供たちが視界に入った。女性の方はしきりにシッターを押ししており、フラッシュの光が少し眩しい。

白いシャツに黄土色のジャケットを羽織った彼女は、記者なのだろうか。

「なんだ……？」



## 紛れもない事実

「いやー、アリオスさん！　またしてもお手柄でしたねえ！　ずさんな市の施設管理の下、危機に陥ってしまった少年たちを鮮やかに救出した手際のよさ……！　最新号にバッチリスクープさせてもらいますから！」

記者らしき女性は声を弾ませ、アリオスの撮影を続けている。彼女がこちらに気づいているのかは、定かではない。

アンリとリュウは、広場のマンホールからジオフロントに侵入した。それだけなら問題はない。今回は悪い出来事が重なって起きた結果である。

もし魔獣の駆除がなされていれば、二人が危険な目に合うことはなかっただろう。それは確かに管理を怠った市の責任と言えるだろう。

最新号とバッチリスクープ、が耳に入ったらしく、リュウは頬を紅潮させ、アンリに話しかけている。一方アンリは複雑な表情を浮かべていた。誰もそんなことで新聞に載りたくはない。

「……グレイス。あまり騒ぎ立てないでくれ。確かに市の管理も問題だが、この子たちの行動にも問題がある。偏った記事は感心しないぞ」

「いえいえ、あくまで読者のニーズにだけ応えているだけです。それに今回は面白いゲストもいるみたいですし」

嗜めるアリオスにも、女性　グレイスは一向に意に介さない。あくまで読者のニーズにだけ応えているだけだと言って。

今回の件は、市だけに問題がある訳ではない。ジオフロントは本

来、関係者以外の立ち入りが禁止されている。子供とは言え、ジオフロントに侵入した彼らにも非がない訳ではないのだ。

勿論、市が管理を怠ったことが一番の問題なのだが、グレイスが言う通りに記事が掲載された場合、誤解を与える可能性がある。

公平を期する、と言う点では大いに問題があるだろう。もつとも、彼女の態度からして冗談なのか本気なのか、一概に判断出来ないが、グレイスの視線がアリオスを飛び越し、ルインたちに向いた。彼女の青い瞳には、隠しきれない好奇心が見える。歩き出し、アリオスや子供たちの脇を通りすぎた彼女は、シャッターを切りながら面白おかしく言葉を紡ぐ。

「クロスベル警察の未来を背負う『特務支援課』初めての出勤！しかし力及ばず、いつもと同じように遊撃士に手柄を奪われるのであった！ ああ、未熟さを痛感した若者たちは果たしてこの先に待ち受ける数々の試練を乗り越えられるのか！？」

「な、なにを……」

まるで記事をそのまま読み上げているかのよう。

突然のことにロイドは驚き、ランディはおいおい、と若干呆れている。テイオは冷たい視線をグレイスに向け、エリイはため息混じりにこう言った。どうやらクロスベルタイムズの記者の人みたいねと。

クロスベルタイムズは、遊撃士やアリオス人気の一因を担ったとも言えるかもしれない。

ルインもたまたま目を通すのだが、新聞というものは凄まじい影響力を発揮する。クロスベル警察の失態や遊撃士の活躍など、瞬く間に人々に伝わるのだ。

今回の一件も恐らくは記事にされるに違いない。彼女の口ぶりからして間違いなく。

ただ、こちらから言い返すことはない。というか出来ない。多少の脚色はあるものの、アリオスに危機を救われたのは事実だし、ここで反論した所で意味など無いからだ。

「彼らに関しても決めつけはあまり感心しない。一応、この子たちを最初に助けたのは彼らだ。まあ、ツメは甘かったようだが。初めはこんなものだろう」

「あらら、やっぱりそうなんだ。ま、記事で色々書くと思うけど、あんまり気にしないでね？ お姉さんからのエールだと思ってこれからも頑張つてちょうだい。それで、アリオスさん。一度、独占インタビューをですね」

そんなルインたちに代わり、口を開いたのはアリオス。ツメが甘かった。その通りだ。

アリオスの言葉を聞いたグレイスは、驚くどころか納得している。悪びれるどころか、気にしないでと笑う辺り、ちゃっかりしている。知っていてわざと言っていたのだろう。悪意、というほどのものではないが、好意的かと言われれば首を傾げるところだ。

頑張つてちょうだい、と締めくくった彼女はルインたちから再び、視線をアリオスに戻した。

独占インタビュー、の一言に、アリオスは、前に断っているはずだが、と鬱陶しそうな顔をしてアンリやリュウを連れて歩き出す。そんな彼らの後にグレイスが続く。

すると、アリオスの後ろを歩いていたリュウとアンリが足を止めて振り返った。

「じゃあな、兄ちゃんたち。一応、助けしてくれたことには礼を言っ  
ぜ。ありがとな！」

「あ、ありがとうございました！」

最後まで生意気なリュウと丁寧なアンリ。全く違う二人の態度にどこか微笑ましく感じながらも、釈然としない思いが残った。ルインたちが手を振り返すと、二人は再び歩き出す。

一行に残ったのは、釈然としない思いと疲れ。僅か数分だったが、どっと疲れたのは何もルインだけではないだろう。

「……何でしょう、今の」

「俺たちのことをピエロに仕立てようってハラみてえだが……。結構好みのお姉さんだけどちよいとクセがありそうだなあ」

「きつと面白おかしく書かれて笑い者ね。『遊撃士の真似事』が関の山かしら。何であれ、言いたい者には言わせておけばいい。人気を取ることが仕事じゃないもの」

金色の目を細め、不快感を露にするテイオ。その声はやや低い。ランディはというと眉を潜めた後、一転して不拔けた顔になった。自己紹介で趣味はナンパでグラビア雑誌の鑑賞と言っていたこともあり、そう言うキャラなのだろうか。

ルインはそんな彼をとりあえず無視すると、微かに笑って、彼らが消えた場所を見つめる。

明日には設立したばかりの特務支援課の失態について、面白おかしく書かれているだろう。

ただ、グレイスは記者。クロスベル警察の不甲斐なさをその目で見てきたはず。ならば、あの態度も少しは納得出来る。

何にしても、言いたい者には言わせておけばいい。ルインたちの仕事は人気を取るのではないのだから。

「まあ、それはそうなんだがなあ……」

「それでロイド、どうするの？」

「あ、ああ……セルゲイ課長が出した課題はクリアしたし……いったん警察本部に戻ろう。子供たちの件についてもきちんと言報告したいと」

エリイに声を掛けられ、我に返ったロイドは、気を取り直して仲間たちを見回して口を開く。

アクシデントはあったが、一通り魔獣を掃討する、という課題はクリアした。アンリヤリユウたちについての報告も必要だろう。

まずは警察本部に戻って報告を、とロイドが纏めたその時、どこからか甲高い鳴り響く。どうやら音は、支給された戦術オーブメントからしているらしい。追加された通信機能だろう。

ロイドはテリオに促されて赤いボタンを押し、言われたようにエニグマを耳に当てる。

通信相手はどうやらセルゲイではないようだ。告げられた言葉にロイドの動きが止まる。通信を切った彼は、顔を強張らせてこう言った。副所長がお呼びらしい、と。

嫌な予感しかしないのは、きつとこういう事で。

クロスベル警察に戻ったルインたちは、休む間もなく副所長の元へ案内された。

副所長の部屋だけあって、それなりに豪華で片付いている。ルインは眉を吊り上げる。ピエール副所長を前にしながらも、部屋を見回していた。

白い鉢に入った観葉植物が隅に置かれており、壁には導力銃や剣が飾られている。床にはクロスベル警察の紋章が描かれており、副所長が座る椅子と執務用の机の下には真紅の絨毯が敷かれていた。

机の上には羽ペンと積みあげられた書類。恐らくはそれを捌いているところだったのだろう。副所長は紙を握り潰さんばかりの勢いで、相当ご立腹だということが窺える。

「まったく！ いったいなんのつもりだね！？ 任務に関係ないことに首を突っ込んだあげく……！ あのアリオス・マクレインに手柄をもっていかれて……っ！ おまけにそれを《クロスベルタイムズ》にすっぱ抜かれてしまうとは……！」

ひと通りの報告を終えると、一列に並んだルイン達に罵声を浴びせかける。任務に関係無いこと、はアンリとリュウのことである。

アリオスに手柄をもっていかれたというが、手柄も糞もないだろう。そもそもジオフロントで子供たちを見捨てていた方が大問題だ。

あまりの言いようにロイドが口を開きかけるが、副所長がそれを許さない。

「うるさい、言い訳無用だ！ まったく、だから私は新部署設立など反対だったのだ！ あの忌々しいセルゲイのヤツが交換条件をもちかけなればこんな事には……！」

「あの、それはどういっ……」

「ええい、君たちには関係ない！ い、いや……そう、だな。部下が一人も居なくなればあの疫病神だって働きようが……」

ここにいないセルゲイに文句を並び立てる副所長だが、聞き捨てならない言葉があった。

特務支援課はセルゲイによって作られたというのか。副所長は新部署設立に反対だったが、交換条件を突きつけられ、吞まずにはいられなかった。そういうことなのだろうか。

金切り声を上げ、怒鳴りつける副所長だが、その顔が怒りから笑みになる。どうせ、ろくでもないことでも思いついたのだろう。

聞こえていないとも思っているのだろうか。丸聞こえである。

これにはルインも呆れるしかない。副所長がこれではお話ならない。

一人で納得したかと思うと、副所長はルインたちを見据え、とんでもない言葉を吐き出した。

「君たち、悪いことは言わない。『特務支援課』への配属を一両日中に辞退したまえ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2511x/>

---

蒼の残影

2012年1月12日23時56分発行